

マリア・フィロメナ・モデル 『ゲ-テの形態学的思想』 第一部{その1}〔翻訳・注解〕

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長尾, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5141

マリア・フィロメナ・モルダー

『ゲーテの形態学的思想』

第一部{その1}¹[翻訳・注解]

長尾史郎

目次[全体]

序説[既訳²]

第一部『具体的思考』の実行の固有の相貌 (fisionomia; physiognomy) とその諸条件[本稿および次稿以降]

第二部『具体的思考』に内在的な知覚的な諸プロトタイプ[原型]と言語(ランガーシュ)の諸プロトタイプ — 諸通過の理論と翻訳の理論としての形式[形態]的プロジェクトの確立[未訳]

第三部〈現われること (aparecer; appearing)〉[現われ、現象]の諸グレード[度合い、段階]と省察の諸グレード — 自然の、および芸術の図式[未訳]

目次

第一部 『具体的思考』の実行の固有の相貌とその諸条件{その1}

モットー

展開

1. *Crítica da Faculdade de Julgar* [Kritik der Urteilskraft, 『判断力批判』]の肥沃な諸当惑
2. 判断力のゲーテ的な変形 — *gegenständige Denken* [対象的(な)思考(すること)]の構成。

参考文献

¹ [訳注] Maria Filomena Molder, *O Pensamento Morfológico de Goethe*, Imprensa Nacional-Casa da Moeda, Lisboa, 1995. [502 pp.]本稿では、そのうち、「第一部 (Primeira parte)」の「モットー (Mote)」、 「展開 (Desembolvemento)」の1. および 2. (pp. 53-85)を訳出した。

² [訳注]『明治大学教養論集』通巻334号, 2000年3月(以下、「序説」として訳に言及するときはそのページ数による)。

第一部 『具体的思考』の実行の固有の相貌 (*fisionomia; physiognomy*) とその諸条件

その後、彼は神の跡について歩んだ 『オディッセイア』V, 193³
 もしも私が、誰かが、一(uno)であるもの、そして一つの多数性の自然な
 統一であるものへ向かって両眼を導く能力を持っているものと判断したと
 すれば、私は彼の後に着いて行き、あたかも神に従うかのように彼の跡を
 追いかけたことだろう。

Platão, *Fedro* [*Phaedrus* — プラトン『パイドロス』]⁴

モ ッ ト ー

われわれが考えて(思考して)いるときに生じるものを、思考[思想]の行為
 を科学 —— 近代以降に獲得した、操作的・技術的な意味での科学 —— に

³ [訳注]「……女神のうちにも気高いニンフはさっそく/先へ立ち案内すれば、後から
 彼もその足跡につき、/……」(ホメロス『オデュッセイア(上)』呉茂一訳、岩波
 文庫、1971)「美貌の仙女[女神カリプソ]は、さっさと先にたって歩き出し、
 オデュッセウスその後に従い、……」(ホメロス『オデュッセイア(上)』、松平
 千秋訳、岩波文庫、1994, p. 137) “So saying, the lovely Goddess with swift
 pace/Led on, whose footsteps he as swift pursued.” (EVERYMAN'S LI-
 BRARY CLASSICAL, No. 454, *The Odyssey of Homer, Cower's Translation of
 Homer's Odyssey*, V, 229-230.) 翻訳底本では「[男]神(o deus)」となっており、
 また EVERYMAN'S LIBRARY 版では第229-230行になっている。(参考)
 「パラス・アテネはすぐさま先へ案内してゆかれるので、彼も女神の足跡
 につき、歩を進めたが、/……」(VII, 37-8 — 呉茂一訳、上掲)「パラス・
 アテネはさっさと先に立って歩き出し、オデュッセウスは女神の後から随い
 てゆく。」(松平千秋訳、上掲, p. 172)

⁴ [訳注]「ソクラテス このぼくはね、パイドロス、話したり考えたりする力を得る
 ために、この分割と総合という方法を、ぼく自身が恋人のように大切にしてい
 るばかりでなく、また誰かほかの人が、ものごとをその自然本来の性格に
 従って、これの一つになる方向へ眺めるとともに、また多に分れるところま
 で見るだけの能力をもっていると思ったならば、ぼくはその人のあとを追う
 のだ、『神のみあとを慕うごとく、その足跡をたどりつつ』ね。」(藤沢令夫訳
 「パイドロス」266D — 『プラトン全集 5 饗宴・パイドロス』; 『 』内は、
 上記[脚注3]の『オデュッセイア』の改変になっている。)

固有の一つの認知行為から区別されるものにするものを、解明し、光の下へもたすべく試みる必要がある。〈思考すること〉の行為は一つの可視の行為ではない——因みに、どの心的な行為とも同じくだが。しかし、道具的な認知行為は、自己を固定し、自らを教育し、進歩することを狙うが——現存する世界との関係で、自分の適用と効果の度合いを証示しつつ——、それとは異なり、思考[思索]的な行為(o acto pensante; the reflecting act)は自分を自分自身に基づかせ、諸事物の世界との間にいかなる承認的な諒解をも直接には取りつけないように見える。上述のような狭義の認知行為は、自分自身の外に目的を持っている(科学的な社会にとって公けのかつ内生的な諸イメージは意義深い——科学の征服、および自然の征服、諸進歩、質的諸飛躍、諸イノベーションと諸改革、諸統合および諸超克が語られる)。認知的な行為を通じて、現実は一規則制定的(legislador; legislating, legislative)かつ構成的な、優れて転換的な力[権力]に直面させられている。

反科学的諸批判の素朴極まる様相の主張が問題になっているわけではなく、それらの批判から、科学と哲学との間の距離に垣間見られる距離に自ら適応するように見えるものを取り除くことが眼目なのだ。科学的発見行為の偉大さと崇高さを前にした盲目が問題なのではなく、むしろ、哲学的行為が、科学が実現するような類に属する一つの認知行為ではないということを証示することが試みられるのだ。執拗にも(固執をもって; *persistente; persistently*)思考[思想]は自分自身に一つの要求を突き付ける、——それもわれわれが思考するその度毎に反復される問い(詰問)という形式[形態]の下に——それは、哲学の固有の認知行為は何に存するのか、すなわち、哲学とは何か? という問いだ。籤引きの車回し、籤の繰り返した(「骨を髓までしゃぶる」——こうハーマンはヘルダーへの1784年8月10日の書簡でそれを記述している)——思考[思想]の行為のあの蓄積の無い無限の未完成、それこそが心を乱し、その抵抗し難い真の魅力をそれに与えるものなのであり、それは反復する〈覚醒[すること]〉にかくも似た、あれほど

源初的であれほど古い行為だ。終わりも無く哲学のプロジェクトを再開することが、それに一つの有機体の拍動(*uma pulsão orgânica; an organic pulsion*)の性格を与える。哲学はプラトンがそう考えたように、リズムカルな秩序を持った[リズムの次元の]ものであり、その形式[形態]の法則はエロティックだ。そうしたことが科学的な認知行為の特徴であるとは言えない。科学は不断に(そして、カント以来の哲学的大義もそれを裏書きしたのだが——因みにカントは、それ以前には未聞の意味での一つの認識論的転回の起源を与えたのだ——)その轉換的な力、その統制的で変革的なエネルギー、その積極的な自発性を強調する。まさにここでこそ、科学の認知行為(これは常に操作的な諸結果を持つとは限らないのみならず、それらの諸結果によってコード化された一つの道具化へと、総ての靈魂的[*ánimica; pertaining to soul*]な諸力を絡め取って[拘束して; *constranger; constrain*]しまいもする)と、哲学の思索[思考]的行為、あるいは思考することに固有の思索的行為との間の根源的な差異を正確に垣間見ることができるのだ。ヴィトゲンシュタインはこの差異を告白の形で説明し、概念のおよび美的な諸設問と科学的諸問題とを区別した。前者を後者よりも選好して、彼は自分の選択を正当化して言う——問題になっているのは、非自発的な、靈魂的な次元の妥協である——科学的な諸設問は単に彼の興味を惹くだけだが、概念的諸設問は彼を魅了するというのだ——「科学的な諸設問は私の興味を惹かないでもないが、本当は決して私を魅了することはない。私にとってそうなのはただ概念のおよび美的な諸問題のみだ。根本において私は科学的な諸問題の解に無関心だ。だが、他の種類の諸設問についてはそうではない⁵。」

思索的行為は、〈固執する[こと](*persistir; persist*)〉という目的以外の目的は持たず、その固執(*persistência; persistence*)は、不安を誘うような脆弱

⁵ *Vermischte Bemerkungen, Eine Auswahl aus dem Nachlaß*, hrsg. von Georg Henrik von Wright. Unter Mitarbeit von Heikki Nyman. Bibliothek Suhrkamp, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1978², p. 153 [1949].

さを持つ —— それは他の思索的行為(それが前者を再興する[restabelecer; re-establish]べく、再開始する、つまり再思考する)の意図に依存しているのだ。一つの思考[思想]の有効性は、多分、一つの矛盾である、と言うのは、予見し得る、そして正当[合法]化できる結果への適応(適切性; adequação, adequateness, adaptation)という意味においてだ —— つまり、一つの思考[思想]の有効性は、純粋に間主観的な一つの出来事なのだ。カントのタームで言えば、認知的な規則制定(legislação cognitiva; cognitive legislation)の側にはなく、省察の、約束の、希望の側に在るのだ。思索の行為が実現される度毎に、ある一定数の諸経験が実現される —— これらの経験は固有で内在的で拘束的(constrangedor; constraining)なことは、その存在自体の意味の諸法則と同じだ —— すなわち、それらは、われわれが思考しているときにやって来てわれわれに遭遇するのだ。思考[思想]はその諸起源以来、あの構成的諸拘束(constrangimentos constitutivos; constitutive constraints)の意識を持っている —— 真理は、ギリシャ人たちにとっては、諸前提から出発して演繹して議論することも、諸特殊の観察から出発して帰納によって発見することもできず、反対にそれ自らに従っていたのであり、それによって nous [ヌース]の、その最も高揚した行使における根本的な受動性が解明される。それは、人間たちに対し、「あたかも真理自体が彼らを強いたかのように」自らを押しつけていたのであると、アリストテレスは *Fisica* [*Physica* —— 『自然学』](188b 30)⁶で言っている。*Teeteto* [*Theaitetos* —— 『テアイテトス』](155D)では、その受動性はより表出的な様態で強調され、哲学的なイニシエーションの合い言葉にさえ転化されている —— 「あの情[*pathos*] —— つまり驚く[*thaumazein*]ということ —— は、一人の哲学者にとって完全に固有のものだ。哲学は他の起源[*arche*]を持たない。

⁶ [訳注]「.....その理由を意識してではないが、あたかもそのことの真理性それ自らに強制圧倒されてかのように.....」(出隆・岩崎允胤訳『アリストテレス全集 3 自然学』, 岩波書店, 1976, p. 25)

そして、イシス[Isis]を——タムス[Thamus——「驚かれること」]の娘にしたあの人[Hesiodo, Hesiodos; ヘシオドス]は系譜学について一個の訳知りの風を持っているね。⁷⁾同じく *Kritik der Urteilskraft* [『断力批判』] (§62)においてカントが提示した、*Bewunderung* [賛嘆]と *Verwunderung* [驚嘆]との間の区別⁸⁾は、類比的に科学的活動と哲学的活動との間の区別的優劣を解明する。*Bewunderung*——これは、賛仰(賛嘆; admiração; admiration)と訳せよう——は、自分の起源にあるのと同じあのものから栄養を摂る精神の一つの(それを再生産しつつある)動き、精神を無限定にその発生機の状態に維持する省察的な行為、に関するものだ。*Verwunderung*——こちらの方は、驚き(驚嘆; espanto; astonishment)と訳せよう——

⁷⁾ [訳注]『ソクラテス……実にその^{タウマゼイン}驚異^{こころ}の情こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ。だからまた、天界の使者イリス(虹)をタウマスの子だと言ったかの人も、見たところへたな系譜家ではないようだということになる。[#]。』(田中美知太郎訳「テアイテトス」、『プラトン全集 2 クラテュロス・テアイテトス』、岩波書店、1998)

[#]「驚異(タウマゼイン)が哲学の始まりだという事はアリストテレス『形而上学』第一巻(982b12)にも述べられている。虹をタウマス(驚異)の子だとすることはヘシオドス『神統記』七八〇行に見られる。しかしイリス(虹)とピロソピア(求知、哲学)との関係はあまり判然としない。これを『クラテュロス』408Bと398Dに関連させる解釈もある。』(上記訳書への訳注)

ゲーテも *Materialien zur Geschichte der Farbenlehre* で、古代(原始)人が天文の謎を幻想ないし私的な象徴化によって解く例として、ギリシャ人がタウマス(=驚き; Erstaunen)の娘として象徴化したと述べている(HA 14, S. 11——『色彩論[完訳版]』第二巻「歴史篇」[色彩論史の資料]、pp. 14-15)

⁸⁾ [訳注]『判断力批判』の諸訳書 ①坂田徳男訳、鐵塔社、1932②原佑訳、『カント選書 判断力批判』、理想社、1981③大西克禮訳、岩波文庫、下、1953④“The Critique of Judgement,” GREAT BOOKS OF THE WESTERN WORLD, R. M. Hutchins, Editor in Chief, 42., 1. KA NT, ENCYCLOPAEDIA BRITANICA, INC, 1955)の各訳語を対照すると——

① ② ③ ④

Bewunderung : 感嘆 賛嘆 驚嘆 admiration

Verwunderung : 驚嘆 驚嘆 驚異 astonishment

は、^{はかりごと}謀(図式, プロット; *intriga, intrigue*), 解決さるべき問題, 解かれるべき謎, 調和させられるべき予期せざる不協和, の相の下にある何らかの事物ととられた存在の一つの形式[形態]であり, それは, 含意として, 観察されるものを調整し, 統制し, その起源となった運動を停止させようとする傾向のある一つの包括的な手続きを持つ。この区別は, 「諸事物(諸現象としての)の本質において観察された合目的性[終局性; *finalidade, die Zweckmäßigkeit*】—— 理解(理解力; 悟性; *o entendimento, der Verstand*)に—— によって説明不能の, つまり偶然のものである —— の意図のために提示されている。賛嘆は魂を寛げ, それ[魂]をして知覚可能な表象の彼方に一(一者; *um; one*)を予兆させる —— つまり, 一つの積極的で予告的(*premonitório; premonitory*)な感覚が問題になっている。「かくて, 驚嘆は一つの表象 —— およびそれが与える規則と共に —— と, 既に精神の中に諸根底[*fundamentos; fundaments*]として見出される諸原理との間の不相応(相容れないこと)から生じるところの精神の一つの衝撃である。しかしながら, 賛嘆は, この疑いが消失しても常に再誕生する驚き[驚嘆]である」(*AK V, 365*)⁹。科学の宇宙においては, *Verewunderung* が支配的であり, *Bewunderung* は哲学においてより強く存在する経験であると認めることは不相当とは思われない。

哲学者にとって真理は発見されるものでなく, 見出される(遭遇される)のだが(後に見るように, それがまたゲーテ的な概念でもある —— *erfindenn* [見出す; *find out*]という動詞の特定の用法によってそれが実現される), そ

⁹ [訳注]「驚嘆(*Verwunderung*)は, 或る表象およびこの表象によって与えられた規則と, すでに心の根底にある諸原理とが合一しえないということでの心の衝撃であり, それゆえこの衝撃は, たとえその人の観察ないしは判定が正しいとしても, 或る疑惑をひきおこす。しかし賛嘆(*Bewunderung*)はこの疑惑の消滅にもかかわらずつねに回帰する驚嘆である。」(原佑訳, 上掲書, p. 294)

それは、それ[真理]が常に現存しているのであって、われわれに近づくべくわれわれに与えられている、真理はわれわれに向かって遭遇すべく動いて来る、われわれに対して点すことも消すこともできる光である、という意味においてである。このイメージの通俗性が許されるのはただ、問題になっているのは、本来はわれわれによって創り出されたのではない一つのイメージであり、不断にわれわれのヴィジョンおよびわれわれの運命に関わってくる一つのイメージだということを受け容れるときだけだ。

そのようであるから、哲学的活動は反復、〈他様に言う〉、思考[思想]のそれ自身への(誰か或る思想家、あるいは他の若干の諸思想家の姿をとった)回帰以外の何物をも追求しない。と言うことは、一つの思考[思想]を再現実化(再活性化; *reactualizar*; *reactualize*)するということだろうか? 一つの思考[思想]の再現実化は、ただもっぱら、一つの思考[思想]はただ思考される限りにおいてのみ存在するという意味においてのみ理解されるべきだということだが(その伝達、伝達可能性および再生産[再生]は実質上、この *conditio sine qua non* [絶対条件]を変更しない—— 反対に、それら総てにおいて、伝統こそが、恒常的であり、それ[その条件]を自らに引き受けるよう訴えるものなのだ)、それはまた、他の誰か一人の思考[思想]から出発しないではわれわれは思考することができないということでもある(その人をわれわれのもとに呼び込み、彼をして思考せしめ、他の総ての者たちの思考[思想]の一つの明らかな停止を実現しつつ)—— それはわれわれの思考[思想]の限界を、自分自身と格闘しつつ、求めてのことだ。これらの諸手続きをもってしては道具的認識のプロセスのいかなる *analogon* [類比物]も記述されてはいない。エウドロ・ドゥ・ソウザはその著作 *Mitologia* [『神話学』]で、思考[思想]は自分の限界の外に出たいと(既に思考されたものの諸間隙 [*intersticios*; *interstices*]に残っていたものを思考しつつ)欲しているように見えると言う¹⁰—— あのラディカルな提示こそ、各思考[思想]が自ら開始するに当たって追求するものだ——。ここでもまた、「魂は常に自らの端緒にい

る]のだ(これはヘルマン・ブロッホ[Hermann Broch, *A morte de Virgilio* (*Der Tod des Vergil* — 『ヴェルギリウスの死』)の予言的、アウグスティヌス的な言葉だ)¹¹。

¹⁰ Eudoro de Sousa, *Mitologia*, UnB, Editora da Universidade de Brasília, 1980, §12, p. 23.

¹¹ [訳注]文字どおりの個所は無いが、次のようなくだりがある — »hingerufen zur Erkenntnis des Gesetzes, des zufallsentblöhten,/ ist die Seele in stetem Aufbruch begriffen,/ aufbruchsbereit und aufbrechend zur eigenen Wesenheit hin,/ zu ihrer Kreatürlichkeit und Außerkreatürlichkeit,/ zufallsentblöht beides in der Erkenntnis des Gesetzes,/ Ausgangspunkt und ihr Ziel sphärenvereinigt,/ den Menschen zum Menschen machend 《(*Der Tod des Vergil. Roman. Herman Broch Kommentierte Werkeausgabe*. Band 4. hrsg. v. Paul Michael Lützel, Suhrkamp, 1976, S. 95) ; 「偶然をふり捨てた掟の認識へと呼ばれ/魂はたえず出発の用意をしている/みずからの本質にむかって/掟の認識の中で偶然をふり捨てた/おのが被造物の特性 その粋をこえた特性にむかって。/魂の起点と終点はひとつにむすばれ/そこにはじめて人間は人間となる。」(川村二郎訳『集英社版 世界の文学13 ブロッホ — ウェルギリウスの死』, 1977, p. 80) ; 「諸法則の — 偶然性を取り去られた諸法則の — 認識へと呼び出され, 魂は恒常的な出発に捉えられている — 出発の準備を整え, 出発しつつ, 自らの本質の方へ, 自分の被造物性および被造物を超えた性格へと — この両者とも諸法則の認識において偶然性を取り去られている。出発点とその終点は領域として統一されている。」(拙訳) ; » — gesucht, oh gesucht — oh, Heimkehr —, Ende dem Anfang gefügt, Anfang dem Ende, es herrschen die Götter, noch herrschen sie und ordnen die Pflicht. Und so war's befohlen vom lichtverspendenden Gotte: begreife im Leben den Tod, auf daß er dein Leben erhellte; nur wer zu den Anfängen vordringt — oh, Forschen ist Gottesgedächtnis — erinnernd und aber-erinnernd des Vor-Anfangs Wurzelregion, dem wird mit dem Ende der Anfang, und er erinnert sich jeglicher Zukunft, verbürgt in Vergangenheitstiefe 《(S. 251) ; 「— もとめた, おお, もとめた — おお, 帰郷 — 終末は発端につながれ, 発端は終末につながれ, 神々はなお支配し, 義務をさだめている。光を与える神はこう命じていた — 生のうちに死をとらえよ, 死が汝の生をかがやかさんがために。ただ発端にまで突き進む者のみが — おお, 探求よ, 神の記憶よ —, 発端よりさらに古い根の領域をくりかえし想起する者のみが, 終末と発端との結合を経験することができる, そして, 過去の深みにおいて保証されたありとあらゆる未来を想起することができるのだ。」(p. 219) ; » Oh, Heimkunft bist du, Heimkunft ohne Rückkunft. < —

どこで行使されようと、思考[思想]の行為は、思考する者の意思に完全に依存するような一つの行為ではなく、単に統制された意識からは生じないような、魂に関わる(anímico; pertaining to the soul)一つの運動である。われわれはそれに向かって案内される——そして常に同じ所へと導かれるのだが、それは一つの均質で連続した空間と時間の一つの場所ではなくて、それはシンボルが、促進するイメージがそれを予告するような場所だ——それは想像された、恐れられた場所であり、それをわれわれは不安に感じるのだ。われわれが追求するのは一つの存在(uma presença; a presence), 存在そのもの(a presença; the presence)だ。

必要なことは、記述されつつ——章節から章節へと——行くものが、或る一つの場所に、つまり、総ての諸運動がそこに収斂し集中するところのある一つの場所——一つの遭遇が期待される一つの場所——に導くことが眼に見えるようになることだ。

☆ ☆

☆

> Heimkunft findest du erst am Ziel, dem du, Vergil, noch zuzuwandern hast <<(S. 277); 『おお、きみこそは帰郷、もはや還帰を知らぬ永劫の帰郷なのだ』——『帰郷をあなたが経験なさるのは、目的地に到達されてからのことです、その目的地にむかって、ウェルギリウスさま、あなたはまだ旅をつづけられなくてはならないのです』(p. 243)。> Suche nicht meine Zukunft, nimm meinen Anfang auf dich; wisse um ihn, und er wird zur immerwährenden Zukunft in der Wirklichkeit unseres Jetzt. <<(S. 279); 『わたくしの未来をおさがしになっても無駄でございます。わたくしの発端をお引きとりくださいませ。その発端をよくお知りになれば、それはわたくしたちの今の現実の中で、いつまでも消えることのない未来になりますよ』(p. 245)。

ポール・ヴァレリーは『L'homme et la Coquille [人と貝殻]』¹²で、一つの定式、それによれば身体を精神に接近させることが可能になるとかいう定式の追求について語っている——その定式は〈哲学的な[に]「為すこと」(o *fazer filosófico*; the *philosophical*[ly] *doing*)〉に存していたのだ。そのような追求こそが総てのゲーテ的な思考[思想]の基礎にあるものだ——すなわち、身体の中に源初的な身体[源身体; o *corpo original*; the *original body*](身体の根源[a *origem do corpo*; the *origin of the body*]), *Urkörper*

¹² *Oeuvre*, Tome I, Bibliothèque de la Pléiade, nrf Paris, 1968, pp. 886-907.

[訳注]“Mais nous-memes, ne sommes-nous point occupés tantôt dans 《le monde des corps》, tantôt dans celui des 《esprits》; et toute notre philosophie n'est-elle pas éternellement en quête de la formule qui absorberait leur différence, et qui composerait deux diversités, deux 《temps》, deux modes de transformation, deux genres de 《forces》, deux tables de permanences, qui se montrent jusqu'ici d'autant plus distincts, quoique d'autant plus enchevêtrés, qu'on les observe avec plus de soin?” (p. 906)[「しかしわれわれ自身、或る時は『物質界』に、或る時は『精神界』に没頭してゐるのではないのか。そしてわれわれの哲学は悉く、この差異を解消せしむべき公式、注意深く観察すればするほど、愈々錯綜してはゐるものの、また今までのところ愈々明確な相貌を呈しつつある二つの多様性、二つの『時間』、二つの変形方式、二つの『力』の様式、二つの永続性の表を調和せしむべき公式を、永遠に探し求めてゐるのではないのか。】(斎藤磯雄訳「人と貝殻」、『ヴァレリー全集 9 哲学論考』、筑摩書房、1967, p. 166)]

なお、原本の〈哲学的な[に]「為すこと」〉に対応するかもしれない、次のような興味深い見解がある——“C'était la'imiter le philosophie, et s'efforcer d'en savoir aussipeu, sur l'origine bien connue d'une chose bien définie, que nous en savons sur l'origine du 《monde》 et sur la naissance de la 《vie》./ La philosophie ne consiste-t-elle pas, après tout, à faire semblant d'ignorer ce que l'on sait et de savoir ce que l'on ignore? Elle doute de l'existence; mais elle parle sérieusement de l'《Univers》...” (p. 897)[「これは哲学者を模倣して、明白に定義されたものの明白に知られてゐる起源について、われわれが『世界』の起源や『生命』の発生について知らないのと同じくらゐしらないでみようとするのであつた。/哲学とは、結局のところ、知つてゐることを知らぬやうなふりをし、知らないことを知つてゐるやうなふりをすることから成り立つてゐるのではないのか。哲学は実存を疑ふ、しかも『宇宙』については真面目に語るのである.....。】(同上訳書, p. 156)

[原身体], 非-身体の諸痕跡(徴し; os vestigios do não corpo; the vestiges, signs, of non-body)を発見するのだが, それは, 非-身体[物質]的なもの(o incorpóreo; the incorporal)は, ただ身体[物体]を通じてのみ証示することができるとの確信のもとでだ。

そのような追求は, しかしながら, 哲学的活動全般に一般化できるようには思われない — あるいは, 少なくとも, その決定的な性格がその出発点のラディカルさによって薄められている —。実際, その出発点の一つの分離の経験のそれだ — 一方では身体と精神との, 他方では内部と外部との分離だ — その際, 多くの場合, 身体は外部と, 精神は内部と結びつきつつ —。因みに, 哲学の大きな部分は, そのような手段によって, 思考[思想]のそれ自身との還元不能の一つの経験(何物の側にも着いていないという経験, 時間の継起性を停止させるという経験)という言説の伝統を説明しつつ, 身体を決定的に精神から分離しようと志向したのだが, その分離を狙ったのは, あるいは, 「余りに人間的な」もの — 家庭的な, 経済的な, 政治的な事ども — に不興を覚えてのことであり, あるい死の習得への — ラディカルに身体と精神の交流を純化するとかいう定式への — 思考の経験の執着の中においてであった。前者の場合にも後者においても, 得られるのは, 身内の間に居て祖国喪失状態にあること(*ser apátrida entre os seus; being stateless [exiled] among their kinsmen — Teeteto [Theaetetus — 『テアイテトス』174b*¹³⁾, という永い慣行だ — これは, 思索家に必須の孤独, 思索自体の実践の条件だ —。あの発生機の経験は, 不断に, われわれの伝統に連なる比較的最近のほとんど総ての大思想家において自らを確証した — 最初の諸インスピレーションを拡張し, 諸痕跡を確証し, 思索的行為に固有の諸運動(分離し, 留保すること)に声を賦与しつつ —。それは既に, ソクラテス以前の思考[思想] — 特にヘラクレイトスとパルメニデスに見られる — に栄養を与えており, プラトンのおよびプラトン化的[platonizante; platonizing]な総ての遺産を縦貫しており, それはヘーゲ

ルにまで到るが、彼は例えば *Grundlinien der Philosophie des Rechts* [『法哲学概論』]の §136 (Zusatz [補遺])において、「この最も深い、自分自身と共にある内的な孤独 —— そこでは総ての外部と総ての制限は消散しているのだが ——、この自分自身の内における普遍的な安息所」に高貴さを認めている¹⁴。これと同じ伝統の中で、この孤独の追求は新プラトニズムにおいて

¹³ [訳注]「なにしろ実際、それ[求知者]がこれらから超然としているのは、何も好い評判をとりたがためではないのです。むしろ事實は、この国都にはただその肉体が寄留のかたちで置かれてあるだけなのでして、……」[173E]；「……この種類の者は、近くの者や隣の者について、それが何をしているかということはおろか、それが人間であるかそれともまた何か他の畜類であるかということさえほとんど知らずにすましているのであって、その知ろうと求めて研究に苦心しているのは、むしろそもそも人間とは何であるか、またこの人間の本性に属するものであって、作用を及ぼしたり受けたりする上において他のものから区別されるのは何であるかということなのです。」[174B] (田中美知太郎訳「テアイテトス」、『プラトン全集 2 クラテュロス・テアイテトス』岩波書店、1998)

¹⁴ [訳注]§136 Zusatz —— 《Man kann von Pflicht sehr erhaben sprechen, und dieses Reden stellt den Menschen höher, und macht sein Herz weit, aber wenn es zu keiner Bestimmung fortgeht, wird es zuletzt langweilich: der Geist fordert eine Besonderheit, zu der er berechtigt ist. Dagegen ist das Gewissen diese tiefste innerliche Einsamkeit mit sich, wo alles Außerliche, und alle Beschränktheit verschwunden ist, diese durchgängige Zurückgezogenheit in sich selbst. Der Mensch ist als Gewissen von den Zwecken der Besonderheit nicht mehr gefesselt, und dieses ist somit ein hoher Standpunkt, ein Standpunkt der modernen Welt, welche erst zu diesem Bewusstseyn, zu diesem Untergange in sich gekommen ist. Die vorangegangenen sinnlicheren Zeiten haben ein Aeußerliches und Gegebenes vor sich, sey es Religion oder Recht: aber das Gewissen weiß sich selbst als das Denken, und daß dieses mein Denken das allein für mich Verpflichtende ist.》(G.W.F. Hegel *Sämtliche Werke in 20 Bde., Mit einem Vorwort von Eduard Gans*, hrsg. von Herman Glockner, 7. Bd., Stuttgart 1952, SS. 195-6) [「人々は義務に就いて甚だ立派に語ることができる、そしてこの言説は人間をして崇高ならしめ、その心情を廣くする。だがそれが何の規定へも進み行かないならば、それは結極退屈なものである。精神はそれが権利を有するところの特殊性を要求するものである。之に反して良心は一切の外的なもの一切の制限とが消え失せた最内奥の孤獨、徹底的な自己そのものへの隠退である。人間は良心としては最早特殊性の目的に捉はれない、従つて良心は高き立場、初めてこの意識に、自

己へのこの没落に到達したところの現代世界の立場である。過去の、一層感覚的な時代は、宗教であれ、法律であれ、外的なものとして与えられたものを目前にもつてゐる、之に對して良心は自己自身を思惟としに知り、且つこの私の思惟がひとり私にとって義務あるものたることを知つてゐる。』(速水啓二・岡田隆平訳『ヘーゲル全集 9 法の哲学 —— 自然法及び国家学』、岩波書店、1950, pp. 182-3 —— Gans Ausg. に拠る Glockner Ausg. による訳) ; 「[良心の立場の高さ]われわれは義務についてきわめて崇高に語ることができる。そしてこのような言葉は人々を高め、その心をひろくする。けれどもそれが何らの規定にも進み行かないならば、結局退屈となる。すなわち精神は特殊性を要求し、特殊性にいたってその精神たる資格をえるのである。これに反して良心は、一切の外的なもの及び一切の制限の消失した、ただ自己とともにあるこのような最深内奥の孤独、このような徹底的な自己自身への隠遁である。人間は良心としては特殊性を持った目的によって拘束されない。したがって良心は高き立場、近代世界の立場であり、はじめてこの意識、この自己沈潜に到達した立場である。過去のもっと感性的な時代は、宗教であれ法律であれ、或る外面的なものや与えられたものを目前に持っている。けれども良心とは自己自身を思惟として自覚し、このわたくしの思惟こそがひとりわたくしに義務を課するものであることを知っているものである。』(高峯一愚『法の哲学 —— 自然法と国家学』、論創社、1983, pp. 118-9 —— Gans Ausg. による Glockner Ausg. による訳; 冒頭の[]内の見出しは Lasson Ausg. による) ; 「人は義務について非常に高貴に語ることができ、この語りは人間をより高い所に置き、その心を寛くするが、いかなる決定性にも進まない場合には終には退屈なものになる —— 精神は、それに対して自分が権利を有する一つの特定性を要求するのだ。それに対して、良心はこの最も深い内奥の孤独を自ら共にしており、その下では総ての外的なもの、および総ての制限性は消失している、—— これは、かくも徹底的な自らの内への引き籠りなのだ。人間は、良心としては、もはや特定性の諸目的には縛られていないのであり、かくてこれは、一つの高い立場、近代世界の一つの立場であり、それは漸くこの意識、この自らの内への下降[没落]に到ったのだ。先行する感覚的な諸時代は一つの外的なものおよび所与のものを眼前に持っている —— 宗教法であれ ——、が、良心は自分自身を思考として知っており、また、この私の思考は、唯一、私を義務づけるものとしてあることを知っている。』(拙訳)

(参考)なお、これらの Zusätze は、ヘーゲルの講義の記録を Gans が取捨して収録したものとされるが、その妥当性については議論があり、いわゆる Lasson Ausg. は巻末に移しているし、ホーフマイスターは自分の編んだものには採録していない(*Sämtliche Werke. Neue Kritische Ausgabe*, hrsg. von Johannes Hoffmeister, XII. Bd, Hamburg, 1955, Vorwort, および上掲兩訳書訳者後記・解説を参照)。

—— プロティノスにおいて ——，その頂点に達するが、彼によれば、哲学者の課題がその最も高揚した尊厳に達するのは「孤独者から孤独者への逃走」(*Ennéades* [*Enneades* —— 『エネアデス』], VI, 9, 11)¹⁵の運動の擁護に成功する瞬間である。アリストテレスにおいては、そして、その確認し得る多面的な遺産においては、至福の分離(a *separação beatífica*; the *beatific separation*)、および「分離された者」の主題は、生きた行為として *Protreptikos* [『哲学のすすめ』] 以来 *Metafísica* [*Metaphysica*; 『形而上学』](特に *Metafísica A* [第12巻] 7, 1072b)¹⁶ を経て *Ética a Nicómaco* [*Ethica Nicomachea* 『ニコマコス倫理学』] までに導入されている —— 「英知のある

¹⁵ [訳注] 次のような個所がある —— 「そしてかくのごときが神々の生活であり、人間のうちでも神々のごとき、幸福なる人々の生活なのである。それはすなわちこの世の他のいっさいからの解脱であって、この世の快楽を顧みぬ生活なのである。自分ひとりだけになって、かのものでひとりだけ※をわざわざのぞいてのぞいて行くことなのである。」(*Ennéades*, Texte établi et traduit par Émile Bréhier, Société d'Édition «Les Belles Lettres», Paris, 1960³ [*Enneades*; 田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳『プロティノス全集』第4巻, 中央公論社, 1987] VI 9, 11, 49-5 ※[原訳書の訳注]『自分ひとりだけになって、かのものでひとりだけ』という言い方について、プレイエは、ヌウメニオスの……『感覚物から速くはなれて、自分ひとりになって、善ひとりだけと交わる』ということばに似ていることを注意している。]

¹⁶ [訳注] 必ずしも引用の個所が明確ではないが、例えば次のようなくだりがある —— 「かかるもの{必然に従う天体や自然 —— 引用者}の生活は、我々においてはほんの少時間許されるに過ぎないような最善なるものである。惟うにそのものは常にこのような状態においてあるが(これはもとより我々には不可能なことである)、その理由はそのものにとってそのものの現実態が悦楽だからである。しかしてこのゆえに覚醒や知覚や思惟はこの上なき悦楽であり、希望や追憶はまたこれらのもののゆえに悦楽である。思惟そのものはそれ自体最善なるものに向い、しかして最高の思惟は最高の最善なるものに向う。理由は思惟せられるものの性質を分け持つことによってそれ自身を思惟する。けだし理性は思惟せられるものに触れ、かつそれを思惟することによって、思惟せられるものとなり、かくして理性と思惟せられるものとは同一のものとなる。というわけは理性は思惟せられるものや実体を受容し得るものであり、しかもそれを所有することによって、活動するのである。」(岩崎訳, p. 539)

人は、反対に、まさに自分自身に任されている場合にこそ、思索[観照]する能力を保持するのであり、彼はこの状態で思索すればするほど英知があるのだ」(X, 7, 1177 a 30)¹⁷。ギリシャ的伝統との関係においてあれほど独創的な諸哲学——例えばエピキュリズムおよびストイシズム(大分裂の時代を予兆する諸思想だ)——の英知の概念において、まだ感覚的なものへのいかなる系統的な撤回、貶価ないし不信も存在していないとはいえ、(特にストイシズムにおいて)経験としての孤独の経験の意味が再び採り上げられることを止めていない——これは一つの非連続性、一つの中断、一つの極限の通過を含意し、それに自らをその最も尊敬すべき形式に到るまで譲歩する(この形式は、厳格な意味での学校と弟子との関係は再興せず、むしろ、個人的な *imitatio* [模倣]の価値を聖化する[Armin S.V.F.¹⁸ I, 29; I, n.° 216; III, 140, 32])——。これより十分われわれに近いところで、そしてまさに近代性の経験自体を創始しつつ、消去し難く一つの特異な系統を特質付けなが

¹⁷ [訳注]「いわゆる『自足』ということも他の何よりも観想活動について言われうることであろう。というのは、生きるために必要不可欠なものは、知恵のあるひととも正しいひととも他のそれぞれの器量をそなえたひととも必要とする。だが、このような[不可欠な]ものが十分に調えられても、正しいひとは正しい行為をなすべき相手や仲間を必要とし、節制あるひとについても勇氣あるひとについても、その他このような器量をそなえたひとの誰についてもこれと同じことが言えるが、知恵のあるひとは自分ひとりだけでも観想しうるからである。そして、かれがいっそう知恵の優れたひとであればあるだけ、いっそうそうだからである。もちろん、協同者があれば、その方が好都合であろう。だが、それにもかかわらず、かれはもっとも自足的なひとなのである。」(*Ética a Nicómaco* [*Ethica Nicomachea* X, 7, 1177 a 30; 加藤信朗訳『アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学』, 岩波書店, 1973, p. 342)

¹⁸ [訳注]Joachim von Armin [Collegit] *Stoicorum Veterum Fragmenta* (S. V. F.), [Leipzig, 1903-1924] 4 vol., *Stuttgartiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMLXXVIII*.

ら、ニーチェはその[Also sprach] *Zarathustra* [「ツァラトゥストラ[はかく語りき]」] — これは「孤独に捧げた一つのディティランベ[ditirambo; Dithyrambe, 酒神讃歌]」だ — について語ったのであろう。そして、現代における言葉[語]と哲学者の位置の運命を予兆しつつ、こう断言する — 「最も高揚して哲学をする人間存在とは、孤独とともに自らに専念する者である — それは独りで居たいと望むからではなく、彼が自分に匹敵する者を見出さない一個の何物か[*ein Etwas*]であるからだ」([*Kritische Studienausgabe?*] ed. Musarion Bd. XIX, §985, p. 329)¹⁹。

多分、ただわれわれは、媒介的な一つの解決を求めて競争したはずの一つの思考[思想]を見出すのみなのだろう — 思索する存在を、無限なものを予兆し欲する有限な存在として感じる覚醒の強化という形態のもとで —。問題になっているのは、批判的な努力によって「人類[人間性]の諸限界(*os limites de humanidade; the limit of humanity*)」の積極性を強調する一つの立場だ。何よりもカントが想起されるが、彼にとっては分離のテーマは一つの鍵であって、その鍵は、主体の立法[規則制定]的な自立を実現することを可能にし、本来の意味でノスタルジアを含意しないのだ — とはいえ、最初の *Critica* [*Kritik* — 『批判』]以降のカントの諸テキストを縦断している *Übergänge* [諸移行]の総ての諸要請においてその[ノスタルジアの]悲劇的諸

¹⁹ [訳注] *Friedrich Nietzsche Gesammelte Werke. Band XIV. Aus der Zarathustra- und Umwertungszeit 1882–1888 (Aus der Nachlass)*. Musarion Verlag München, 1925のことと思われるが、本書は編別に原書のような番号は見出されない。なお、*Sämtliche Werke*. Bd. 10には次のような箇所が見出される — 15[21]《*Zarathustra 3. / — H y m < n u s > Bescheidenheit / — H y m < n u s > Einsamkeit*》(S. 484) [「ツァラトゥストラ第三部... — 謙遜の讃歌 / — 孤独の讃歌」(杉田弘子・菌田宗人訳『ニーチェ全集第六卷(第II期)遺された断想(一八八三年五月—一八四年初頭)』, 白水社, 1984, p. 231)]; 16[7]《*Vielleicht als Zarathustra III: Dies ist das Buch der sieben Einsamkeit*》[S. 498 — 「多分ツァラトゥストラ第三部として。これは七つの孤独の書である。」(同上, p. 251)]

帰結の諸痕跡(ニヒリズムはその諸配当を集めた)が見出されはするもの
 一。そうではあっても、われわれは、一つの媒介的な思考[思想]の一つの
 特定の、多分唯一のケースに関わらざるをえない——この思考[思想]は諸
 限界を超越しようとする傾向に決して譲歩しようとせず、それらを好意をも
 って判断し、それらにその固有の尊厳を認めるのだ——。その際、それ
 にもかかわらず(むしろ、多分そのゆえにこそ)、あの先行想定[前提]されたもの
 の(o pressuposto; the presupposed)——これについてはわれわれはわれわれ
 の諸操作の結果であるものを認知し得るのみだ——が自らもたらしたあ
 の荒廢の経験に道を用意することを止めないのだ。

ゲーテにおいては、人間的有限性(a finitude humana; the human finite-
 ness)は深刻なものにされていず、不可視のものへの接近も可視のものに直
 面しての後退とは考えられておらず、また彼の思考[思想]も自分自身との本
 質的な孤独に固執もしていない。彼の最も高揚した親近性は、初期ギリシャ
 思想のアナクサゴラスおよびエンペドクレスの諸展開に求めるべきであり
 ——これは、曖昧な[暗い]もの(o obscuro; the obscure)はただ可視的なも
 のの中にのみ垣間見ることができるという確信に基づいている——、およ
 び、ライブニッツの思考[思想]の放射の中に求めるべきである。ライブニツ
 ツの確言——我はほとんど何物も軽視せず——は総てのゲーテの活動の
 通奏低音と考えるべきであり、それはさらに経験——やはりライブニッツ
 的な経験、存在するもの総てへの、賞賛の言葉に転換された承諾の経験
 ——を縫い繋げている。最後に、ゲーテにおいては、カントによって「人間
 の諸限界」に与えられた意味の一つの初心(ingénua; ingénue)な解釈が証示さ
 れる。まさにゲーテの思考[思想]は初心な思考[思想]の一つの高揚した形態
 と見なされよう——これは、諸々の靈魂論的な方向性と諸々の解釈的な
 還元に対するその純粋な拒絶から出発して理解されるべきだが、それは、次
 のような確信から生じているのだ——つまり、認識している者の課題は、
 限りない探求に、汲み尽くせない接近に、諸対象の穿入に固執することだ、

という確信だ。実際にはそれは、〈言うこと〉のより良い様態を追求する執拗な概念的努力のことなのだ。ここには初心^{うぶ}さ (*ingenuidade; ingenuity*) の痕跡があるが、それによってわれわれは何か一つの原始的な時代の幻想的なイメージへと、あるいは、知(〈知ること〉)の幼年期へと引き戻されるべきではない——「初心^{うぶ}だ」ということは、思考[思想]をその精緻さの足りない表現で宣言することではなく、思考[思想]に対してその源初の諸確信の自由な利用による内奥の安心感を再興してやることである、つまり、存在している〈このもの〉との驚異と信頼の関係への固執を許容することだが、そこでは親密性(〈慣れ親しんだ〉)の経験が違和(〈見知らぬ〉)の経験に重ね合わされるのだ。

しかしながら記しておくべきだと思うが、同時代および先行世代の思想家たちとの関係で浮かんだ親近性について、ゲーテが行った読書渉猟の一覧表を打ち建てようとするのはここで念頭に無い。実際、多くのケースにおいては、一つの影響をそれと限定して証示することはできないし、何よりも、諸読書が完全に知られていた場合でも——例えば、カントの第一、第三の *Critica* [*Kritik* ——『批判』]についてゲーテが傍注を施した諸巻、スピノザ、ハーマン、ないしシェリングについての彼の明示的な認知——、それを直ちに自分の独自の利用のために同化してしまうという非-系統的で散発的な様態(自分の最も私的な諸必要に好都合な一つの出合いという意味で)が知られているのだ。これは、彼が決して無視せず、それに対して省察的な形式を賦与した他者の思考[思想]の採り込みの仕方なのだ。この状況の最も明示的なケースの一つは、《Einwirkung der neueren Philosophie [最近の哲学の影響]》におけるカントへの言及であって、そこではイロニーと批判的評価が、幾度も生じるように、独特の歯切れの良さで結び合わされている——「そこで、*Critica da Faculdade de Julgar* [*Kritik der Urteilskraft* ——『判断力批判』]が私の手元にやって来たが、私はそれに私の人生の最も幸福な諸時代の一つを負っている。ここに私が見たものは、私の最も広範に専念してい

るものが踵を接して配置され、芸術と自然の諸産物相互への関係において論じられ、美的判断と神学的判断が交互に照らし合っていた様^{さま}だった。私の表象のしかたが必ずしも常に著者に従うことができないような、あれこれのステップに何かの欠如を感じたように思われたような場合にすら、この著作の偉大な中心的諸思考[思想]は、にもかかわらず、私自身の〈創造すること〉、〈行為すること〉、〈思考すること〉に相似であった。(…)情熱的に興奮して私は私の道を歩み続けたが、ただますます急速の度を加えたりし——と云うのも、私自身が彼がどこへ導いているのかを知らなかったからだが——、また、内容と、それを私が我が物としたその仕方についてはカンティアンたちの側からは甚だ弱い歓迎に出会っていたものだ。けだし、私が表現していたのは私の中において掻き立てられたものだけであり、私が読んだものではなかったのだ」[HA 13, pp. 27-28]²⁰。従って、ゲーテの思考[思想]と他の諸著

²⁰ [訳注]《Nun aber kam die Kritik der Urteilkraft mir zuhanden und dieser bin ich eine höchst frohe Lebensperiode schuldig. Hier sah ich meine disparatsten Beschäftigungen nebeneinandergestellt, Kunst- und Naturerzeugnisse eins behandelt wie das andere, ästhetische und teleologische Urteilkraft erleuchteten sich wechselseitig./ Wenn auch meiner Vorstellungsart nicht eben immer den Verfasser sich zu fügen möglich werden konnte, wenn ich hie und da etwas zu vermissen schien, so waren doch die großen Hauptgedanken des Werks meinem bisherigen Schaffen, Tun und Denken ganz analog; das innere Leben der Kunst so wie der Natur, ihr beiderseitiges Wirken von innen heraus war im Buche deutlich ausgesprochen. Die Erzeugnisse dieser zwei unendlichen Welten sollten um ihrer selbst willen da sein und, was neben einander stand, wohl für einander, aber nicht absichtlich wegen einander./ Meine Abneigung gegen die Endursachen war nun geregelt und gerechtfertigt; ich konnte deutlich Zweck und Wirkung unterscheiden, ich begriff auch, warum der Menschenverstand beides oft verwechselt. Mich freute, daß Dichtkunst und vergleichende Naturkunde so nah miteinander verwandt seien, indem beide sich derselben Urteilkraft unterwerfen. Leidenschaftlich angeregt ging ich auf meinen Wegen nur desto rascher fort, weil ich selbst nicht wußte, wohin sie führten, und für das was und wie ich mir's zugeeignet hatte bei den Kant-

者の思考[思想]の諸交錯と偶然の諸一致を、各思想家に内在的な系譜に起源を持つ一定の諸テーマの放射の諸形態として扱うのがより適切であろう。かくて問題はあれこれの家族²¹に所属すること、〈見ること〉の一つの様態を拡張し、ないし強化すること、偉大な諸伝統^{おき}の熾の火を熱く保つ——より決定的な瞬間に再点火しつつ——ことだ。

もしも自然な態度の留保の無い思考[思想]は存在しないとすれば、その留保はゲーテによって、その態度の還元不能の諸構成要素の再獲得に転化されている——それは、諸親近性の受容と諸差異についての善意(全体性への一つの衝動に衝き動かされている)、および総ての多様なものの再統合であ

ianern wenig Anklang fand. Denn ich sprach nur aus, was in mir aufgeregt war, nicht aber was ich gelesen hatte.》[「さてここに『判断力批判』が私の手に入り、私はこれに一つの極めて喜ばしい人生の時代を負っている。ここに私は最も統一性を欠いた私の諸活動が踵を接して置かれているのを見た——芸術と自然の諸産物があちらこちらと同等に論じられており、美的および神学的な判断力が互いに他を照らし合っていた——。/たとえ私の表象様式に常に著者が合わせる事が可能になるとは限らなかったとはいえ——あちこちで私には何か欠けているように思われた場合がそうだったが——、しかし、この著作の大きな主要な思考[思想]は私のこれまでの創造すること、〈為すこと〉、〈考えること〉に完全に類比的であった。芸術および自然の内的な生、それらの内部から発する双方向的な左様はこの本に明瞭に表現してあった。この二つの無限の世界の諸産物は、それら自体のためにそこに存るに違い無く、互いに隣り合っているものは、確かに互いの為にそこに在るのであって、意図的に互いの故にそこに在るというのではないのだ。/私の最終的諸原因[諸目的因、究極原因]に対する反感は今や律しられ正当化された。私は目的と作用[結果]を明瞭に区別することができ、私はまた、なぜ人間の悟性が両者をしばしば混同するのかを把握した。私に喜ばしかったのは、詩作と比較自然研究が互いに極めて近接しており、両者は同じ判断力に従っているということであった。情熱的に励起されて、私は自分の諸道を歩んだが、それも、私自身が、それらがどこに導くのか、また、私がカンティアンの下で我が物にしたものとその仕方がほとんど反響を呼ばなかったがゆえに益々息せききって前進したのであった。というのも。私はただ私のうちに励起されたものだけを語ったのであって、私が読んだものではなかったからだ。](拙訳)；既訳は木村直司「近代哲学の影響」『ゲーテ全集 14』, pp. 8-9]

²¹ 「訳注」家族」という表現については、「序説」訳, p. 42, 脚注11を参照。

り、これは自然がその諸実現においてそうするように行為することを再学習するのだ——吸気と呼気を通じて、収縮と弛緩²²を通じて、分析と総合を通じて——。従って、ここに存在するのは、不分明な認識 (*reconhecimento indistinto; indistinctive recognition*) の一つの折衷的形態への再帰のいかなる意図でもなく、認識に対するわれわれの発生機の適合性 (*a nossa aptidão incoactiva para reconhecer; our inchoative aptness for recognition*) を再獲得し発達させようとする意図なのだ。

{一方に、}自然の転換、実質的な変更を導入し、自然を条件付け統制する——一種の再構築 (*reconstrução; reconstruction*) の手法に拠りつつ——ような、哲学的-批判的タームで言うところの構成 (*constituição; constitution*) の資格を有する〈認識すること〉の諸様態がある。また別の〈認識すること〉の諸様態があって、これらは自然の脇に[と並んで] (*ao lado; beside*) 位置し、立法(規則制定; *legislação, legislation*)——これは構成する主体の特権だ——を通じては行為せず、むしろ、それ[主体]を強調的に拡張しつつ、その[自然の]〈現れる[こと]〉の様態と競合する。この、より少なく確言的で、より多く模倣的 (*imitativa; imitative*) な状況こそゲーテが自らを合流させるものだ。しかしこれは、ゲーテが世界の分離の経験を不可欠とは考えないということの意味しないし、彼の思考[思想]には *Krisis* (危機) の経験が無いことも意味しない——この危機の経験は [*Die Leiden des jungen Werther*] 『『若き』ヴェルテル[の悩み]』の出現以来あれほど明瞭な声で表明され、そしてその後、成熟期の諸作品において徐々に消しがたい眩きに転換されたものであり、後に見るように、ノスタルジアと前後不一致として自らを現すものだ。

☆ ☆

☆

²² [訳注]「収縮」と「弛緩」については、言語について述べられた「序説」訳、p. 91、脚注65の訳注および p. 118を参照。

ゲーテが、読者を自分の自然諸研究の流れの中に置き、彼に貴重な統合化的かつ決定的な理論的諸省察を増さしめるとともに、自分の方法(手続き)の独特性、その固有のアイデンティティーの資格を追求するテキスト²³、すなわち、存在するものとの関係に置かれたものを明晰さへもたらすことを追求するテキストは少なくない。しかし、それらのどこにおいても、あの方法が、かくも正当に、かくも簡潔かつかくも圧倒的な仕方では総合化されているところは、次の *Máxima* [『箴言』] 237を措いて他に無い —— 私の内部的な〈活動[すること]〉[*inneres Wirken; o meu agir interior, my interior acting*]の全体は、{自分が}一つの生きた発見的方法[*uma heurística viva; a live heuristics*]、つまり、一つの予兆された規則を外的な世界の中に見出し、それを外的な世界の中に導入することを —— その規則が未認識のものであることを認識しつつ —— 志向する方法であることを示した²⁴。

私の内部的な〈活動[すること]〉の全体性は、自分を一つの生きた発見的方

²³ 中でも《Analyse und Synthese [分析と総合]》、《Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort [唯一の機知に富む言葉による重要な要求]》(HA 13)、《Einwirkung der neueren Philosophie [最近の哲学の影響]》、《Der Versuch als Vermittler von Objekt und Subjekt [対象と主体との仲介者としての研究]》、《Der Verfasser teilt seinen botanischen Studien mit [著者が彼の植物学的研究を告げる]》([訳注]以上は総べて、次に訳出あり —— 『ゲーテ全集 14』、潮出版社、1980)、《Farbenlehre [『色彩論』]への「緒言」「序論」および(その教育的および歴史的な部分の)無数のパラグラフが念頭に置かれている》([訳注]この本は第一巻が「教示篇・論争編」、第二巻が「歴史篇」になっている)。

²⁴ [訳注]《Mein ganzes inneres Wirken erwies sich als eine lebendige Heuristik, welche, eine unbekannte geahnete Regel anerkennend, solche in der Außenwelt zu finden und in die Außenwelt einzuführen trachtet.》*M.u.R.*, HA 12, S. 398 [「わたしの内的活動の全体は、生きた発見的教授法のようなものだということがはっきりした。これは、おぼろげに感じていた未知の規範を認知しながら、その規範を外界に見出そう、外界に導入しようとするものである。」(岩崎・関訳, p. 239) ; 「私の内的な働きの全体が自らを一つの生きた発見的方法であることを証示したが、それは、一つの未認識の予感された規則を認知しつつ、その規則を外の世界の中に見出し、それを外の世界の中に導き入れることを追求する。」(拙訳)]

法として示す —— ここには単に一つの認知過程の、あるいは〈感じること〉の一つの様態の、一つの生産的な方法の、あるいは〈思考すること〉の一つのスタイルの決定だけが念頭にあるのではない —— それは一部分の記述、一つの部分性の記述であろう ——。すなわち、認知過程であって〈感じること〉の一つの様態を包括しないような、思考[思想]の一つのスタイルを包含しないような、自らを一つの創造的な方法として顕示しないようなものは無いのであって、その同じ相互性は他の諸機能の各々との関係を通じて自らを打ち建てることのできるのだ。

私の内部的な²⁵〈活動[すること]〉の全体性は、まだゲーテの同時代人だった一人の思想家の巨匠的直感を濃縮している —— 彼はゲーテに考えるための多くを与え、考えるべき多くを与えた ——。われわれはハーマンのことを語っているのだ —— 人間が理解するもの総ては(これはその行為を通じた、あるいはその諸言葉[語]を通じた実現だ)その再統一された諸力から湧き出すものであるべきで、「孤立させられているものは総べて非難さるべきだ」²⁶。その全体性における人間こそが、その諸々の企てに自らをコミットさせることができ、いかなる縮減ないし部分性もその不正の、誤謬の、不適切さの、不完全さの、失敗の応分の分け前を持つことになるのだ。

私の内部的な〈活動[すること]〉の全体性は、{自分が}一つの生きた発見的方法であることを示した —— *Wirken* [〈活動[すること]〉]の中には〈操作すること (operar; operate)〉、〈効果を発揮させること (efectuar; effectuate)〉、〈生産すること (produzir; produce)〉、〈完遂すること (levar a cabo; carry out)〉の諸観念が、あらゆる形式 —— 〈観察すること (observar; observe)〉、〈収集する (coleccionar; collect)〉、〈比較する (comparar; compare)〉、〈秩序(順序)付ける (ordenar; order)〉、〈直感する (intuir; intuit)〉、〈創造する (criar; create)〉 —— の下で存在している。これらは互いに不可分であり、

²⁵ [訳注]「内部的な」は原文で強調されていない。

²⁶ [訳注]「序説」脚注88を参照。

また外部的な形式[形態]をとるために、内部と外部の間の関係と親近性を刺激し、認識するために呼び出されるものだ。*Inneres Wirken* [内的な[に]〈行為[すること]〉]は、追求の一つの生きた過程と見られるべきだ——それは、同時に一つの収穫、一つの従順および一つの欲望に満ちた衝動でもある追求だ。それは、一つの予兆された規則を(この予兆は認識の可能性の諸条件の一つ——予感的な構造、予感——を、指示する他の一つの仕方だ——この予感、ここでは、その方法的な姿を超えて一つの幻視者[見者]的(*vidente; visionry*)な性格によって特徴づけられている)、——その規則が未認識のものであることを認識しつつ——外的な世界の中に見出し、それを外的な世界の中に導入することの追求だ(この〈見出すこと〉と〈導入すること〉との照応が主体的な衝動の本性と客体的な力の本性ととの間の起源の同一性を顕示する)。

規則が未認識のものであるということは、一つの効果を特徴づけるものだ——それをわれわれは不調和(*dissonância; dissonance*)と呼び得ようが、この不調和は、しかし(あたかも諸影が光を暗くしないのと同じく——その印しなのだから——)、その認識可能な放射——適応的なリズム、主体と客体の共-本性[自然]性(本性を同じくすること; *co-naturalidade, co-naturality*)——を無化しない。反対に、主体の中の一つの未認識のものに等価な客体中の一つの未認識のものを発見に従わせることによって、その共-本性性は増し、強化される——と同時に、パラドクシカルにも、主体は客体に還元不能であることが見出され(各々は他に等しく、かつ、さらに何かそれ以上のものだ)、主体の客体への転換を通じて訴えつつ——〈行為すること〉の全体性の究極の熱意は自らを客体に^{アマルガマール}熔融すること、自らを現象に交じり込ませること、それを食らい尽くすことだ²⁷。

²⁷ Cf. *Maximen und Reflexionen* [M.u.R. — HA 12] 514, 512, 515¹⁾. 「熔融する」[アマルガムにする; *amalgamar, amalgamate*]という語は、錬金術に起源を持つ語で、青銅を元にしてそれに水銀を作用させて銀を抽出することを意味する。こ

の語は、認知的な価値も持って、《Erfahrung und Wissenschaft [経験と科学]》*HA* 13, pp. 23-25 (これは《Das reine Phänomen [純粋な現象]》*LA* I, 3, pp. 306-307 に対応する⁽²⁾)でも使われるに到る⁽³⁾。ゲオルク・ジンメルはそのゲーテの紹介(1923年公刊)で、特にこの、直感的な主体と直感された客体との統一の確信——これは認識の理論にとって、またゲーテの方法にとって根本的なものだ——を強調している。そのような確信は一つの真正の動機を構成するもので、次のように表明することができる——各々の概念化[把握]の行為はただ、概念化[把握]されるものとの一つの本質的な照応を通じてのみ可能だ。ジンメルは、ついでこの立場の諸帰結を、ゲーテにおける自然の認識に関して引き出す——「各々の認識行為は、いな、各々の創造的な精神的行為でさえもは——それは一つの一定の内容に編み込まれているのだが——、最終的には一つの本質的な同等性——それは主体とその精神的な行為の実在的な対応物との間の同等性だ——にコミットしていることが顕示されるのだ。そして、ただこの様態においてのみ、直感の円全体の中心——〈認識すること〉の〈存在する[こと]〉(ser; be[ing])の中への沈殿——が保証されて在るのだ。」Georg Simmel, *Goethe*, Leipzig, 1913, p. 48⁽⁴⁾。

[訳注](1)[514]《Es ist etwas unbekanntes Gesetzliches im Objekt, welches den unbekanntes Gesetzlichen im Subjekt entspricht.》[*M.u.R.*, *HA* 12, S. 436 —— 「客体のうちには未知の法則的なものがあり、それが主体のうちにある未知の法則的なものに相応している。」(岩崎・閑訳, p. 279); 「客体の中には何か未知の法則的なものがあり、それが主体の中の未知の法則的なものどもに対応すしている。」(拙訳)]; [512]《Die Erscheinung ist vom Beobachter nicht losgelöst, vielmehr in die Individualität desselben verschlungen und verwickelt.》[S. 435 —— 「現象は観察者から切り離されていない。むしろ観察者の個性に組み込まれ、巻き込まれているのである。」(岩崎・閑訳, p. 278); 「現象は観察者から切り離されてはいず、むしろその個性性に吞み込まれ、絡み込まれている。」(拙訳)]; [515]《Alles, was im Subjekt ist, ist im Objekt und noch etwas mehr. Alles, was im Objekt ist, ist im Subjekt und noch etwas mehr.* Wir sind auf doppelte Weise verloren oder geborgen: Gestehn wir dem Objekt sein Mehr zu,/ pochen wir auf unser Subjekt.》S. 436. 「主体のうちにあるものはすべて客体のうちにあって、なおその上にあまりがある。客体のうちにあるものはすべて主体のうちにあって、なおその上にあまりがある。/わたしたちは二重の仕・方で失われた、もしくは安全に守られた存在である。/わたしたちが客体にそのあまりを認めれば、/わたしたちの主体を守り抜くことになる。」(岩崎・閑訳, p. 279); 「主体の中にあるものは総て客体の中にあり、しかも[客体の中には]さらに何かがあり、客体の中にあるものは総て主体の中にあり、しかも[主体の中には]さらに何かがある。/われわれは二重に失われあるいは保護されている——われわれが客体に対してその〈さらに何か〉を認めてやれば、それはわれわれの主体に固執することになるのだ。」(拙訳) —— ※印以下の文は一段下げて、

かつ/印で改行して組んである。]

- (2)実は LA I, 3, SS. 306-308.《Erfahrung...》のタイトルでは WA II, 11 (75), SS. 38-41にもある。両者は同文である(ただし、例えば、Facta [HA, WA]と Faktata [LA]のような綴りの差異は見られる)。
- (3)《...zeigt sich aber manchmal ... ein Fall, der meinem Gesetze Widerspricht, so sehe ich, daß ich mit der ganzen Arbeit vorrücken* und mir einen höhern Standpunkt suchen muß./ Dieses wäre also, nach meiner Erfahrung, derjenige Punkt, wo der menschliche Geist sich den Gegenständen in ihrer Allgemeinheit am meisten nähern, sie zu sich heranbringen, sich mit ihnen (wie wir es sonst in der gemeinen Empirie tun) auf eine rationelle Weise gleichsam amalgamieren kann.》[S. 24; auch LA I, 3, S.; WA II, 11, S. 39 — 「私の[現象から帰納した]諸法則に矛盾する次のような一つの場合が時々生じるので、私は、自分の作業全体を前へ進め、より高い観点を追求しなければならないのを見る。／これは従って、私の経験によれば、次のような点なのだ — つまり、人間精神が自らを、その一般性における諸対象に最も近く接近させ、それらを自らに引き寄せ、自らをそれらと(他の場合に普通の経験的なものにおいてそうしているように)合理的な仕方では融融できる、そういう点だ。】(拙訳)※ vorrücken は原文; vorrücken と解する。既邦訳は、木村直司「経験と科学」『ゲーテ全集 14』, p. 29にある。]
- (4)《Jedes Erkennen, ja jedes geistige Schaffen, das sich an einen gegebenen Inhalt knüpft, offenbarte sich zuletzt als an eine Wesensgleichheit gebunden, die zwischen den Subjekt und den realen Gegenbild seines geistigen Tuns besteht. Und damit ist das Zentrum des ganzen Anschauungskreises: die Einsenkung des Erkennens in das Sein — erst gesichert. Denn damit begreifen wir, nun nicht mehr psychologisch, sondern metaphysisch, daß die Wahrheit von den Sein des Subjektes abhängt: sie ist dazu legitimiert, weil ihr reales Objekt der Realität des Subjekts verwandt oder gleich ist — weshalb wir denn auch, wie Goethe so oft ausspricht, durch unsere jeweilige Individualität von so und so vielen Erkenntnissen ausgeschlossen sind.》[「一つの所与の内容に結びついた各々の認識、いな、各々の精神的な創造は、最後に、一つの本質の同等性 — 主体とその精神的行いの實在の側の対応物との間の同当性 — に縛り付けられているものとして開示された。そして、そしてそれと共に、直感の円の中心 — 認識者の存在への沈入 — が初めて保証される。】ついで、それによってわれわれは、今やもはや心理学的にではなくて、形而上学的に、真理は主体の存在に依存していることを把握する — 前者は後者への権利を認められているのだ、というのは、その實在の客体は主体の實在性に近接したものだから、あるいは、同等なものだからだ — であればこそまた、われわれは、ゲーテがあればほどしばしば表明しているように、われわれのその時々個性性によってあれこれの数の諸認識から除外されてもいることになるのだ。】(内が原本引用部分)]

生きた発見の方法は決定されないものを決定することを、規定されないものを特定化することを執拗に欲する。あの定式化可能なもの(o formulável; the formulatable)と除外され[失われ]たもの(o omisso; the omitted, neglected)との間の²⁸非同等性への固執——自らを提示するものと、未認識のものとして認識されるものとの間のあの運動に留まるという苦痛に満ちた決定——は定式化可能なものの限界の確定を可能にする。残存する残りのものは不可知(未知)なるもの(incógnita; incognita)——ゲーテが計り知れないもの(insondável; unfathomable), 窺い知り得ないもの(inescrutável²⁹; inscrutable), 言い得ないもの(indizível; ineffable)と呼ぶ——ものの価値を、刺激的で魅惑的な一つのエネルギーを与えられたもの、成長と発展の源泉、一つの最初のものにして一つの最後のものである一つの光を与えられたものの価値を獲得する。

法則が隠されて在ること、予兆される規則が未認識のものと認識されること、——これは神秘的な諸隠喩の縫い目の無いヴェールが下ろされることも、認知的努力が無に帰することも意味しない。ゲーテにとって禁じられた諸道は無い——それを通じて行けば、どの方向を採ろうと同じ目的地に着く諸道を持つことが可能なのだ——。彼のパラダイムは *Faust* [『ファウスト』]の母たち³⁰に導く道だ。そのようなものである限りでの総ては岸の無い湾であるとしても、そのようなものである限りでの総ては探索不可能なもの

²⁸ ゲーテにおける真の出口の無さ(o aporético; the aporetic)——問題(o problema; the problem)の所在——は<の間[entre; Zwischen; between]>の所在によって特徴づけられる(後に見るように)。

[訳注]この概念については「序説」(I-B)にも記述がある。

²⁹ [訳注]原文は inescrutável だが、本文のように訂正。原文のような単語は無いが、強いて訳せば「聞き得ない」となろう。

³⁰ [訳注]《Mephistopheles./ Ungern entdeck' ich höeres Geheimnis. —/Göttinnen thronen hehr in einsamkeit,/ Um sie kein Ort, noch weniger eine Zeit —/ Von ihnen sprechen ist Verlegenheit./ Die Mütter sind es!》(6212-6216; *Goethes Faust*. Kritisch durchgesehen, eingeleitet und erläutert von Robert

であるとしても、そのために、追求する人に対して諸制限を導入すべきであるということにはならない。ここに働いているのは、—— 他の諸行論においてと異なり —— 事物の内容の無限性とわれわれの知(〈知ること〉)の間の不相応であるというよりは、このテキストにおいてゲーテが強調するのは、われわれの見る如く、客体の中には一つの未認知のものが在るが、それは、主体の中なる一つの未認知のものに照応する —— 除外できないその親近性を理解しつつ —— ということだ。

自らあの残存する残りのもの、あの不可知(未知)なるものに値するようになるという冒険をしつつ、ゲーテはそれを —— 自分の認識の衝動の *medium*[媒体]そのものに転換しつつ —— 自らの〈思考[すること]〉、〈活動[すること]〉の真の要素とする。それはマックス・シェラーが言う通りだ —— 聖なるものの足取りの跡に着いて行くこと、およびそれと共に歩むこと、それと共に行くこと、それが形而上学だ³¹ ——。跡に着いて行くということは、先行するのではなく、未認識のものへの牽引によって引き上げられるのであって、このような仕方ではわれわれはゲーテにおいて彼の〈活動[すること]〉の全体性を決定することができるはずなのだ。

Petsch, 2. Ausg., bibliographische Institut, Leipzig, [1925], S. 276.) ;「メフィストフェレス/実は高尚な秘密は打明けたくないんですが。——/寂しい所に女神たちが神神しく座についている。/その周りには場所もなければ、まして時間もない ——/この女神については、語るさえ難儀なんだ。/それは母たちなのです。」(6212-6216 ; 相良訳, p. 194)母は「無限に生み出す」者の象徴として使われているという(上記訳書, 訳注, p. 374)

³¹ 《Den Schritten Gottes in der Welt nachgehen und mit ihm gehen —— ist Metaphysik》. [世界における神の歩みに着いて行き、神と共に行くこと —— それが形而上学だ] —— Max Scheler, *Schriften aus dem Nachlass*[『残された諸著作』], Bd. II *Erkenntnislehre und Metaphysik*[『認識理論と形而上学』], 1979, p. 97. [訳注]《Urphänomen (=Urgestalt)》という節の No. 21 (S. 97でなく S. 92)にある。

展 開

1. 『判断力批判』[*Crítica da Faculdade de Julgar; Kritik der Urteils-kraft*]の肥沃な諸当惑。一つの *Gemeinsames* [共通のもの]の追求 —— 一つの新たな自然像、世界の感情的な発見、源初的な条件としての間主観性の認識。意味を与えることの純粋な活動としての思考。諸能力の互いに対する天職、および諸主観性の互いに対する天職 —— 世界との調和と一つの共通の世界。判断することの活動の源初的イメージとしての美学。

1. *Kritik der Urteils-kraft* [『判断力批判』]は自然の一つの新たな像^{ヴィジョン}に対応する。その像^{ヴィジョン}は三つの当惑(perplexidades; perplexities)の形式[形態]の下で明示化[説明]されるが³²(これらの当惑は、最も包括的な一つの当惑 —— 〈私[自我]〉と世界との調和 —— を考慮に入れている)、それらは偶然性の記しを帯びている、ということは、その像^{ヴィジョン}、何かあるもの —— その〈自らを与えること〉が自らを構成することができず、自らを客体に転換することができないような何かあるもの —— に起源を持っているということなのだ。最初の当惑は、われわれに好意的な一つの世界の発見に関わる —— この発見こそが合目的性(終局性; finalidade; finality, purposefulness; Zweckmäßigkeit)の原理の下で定式化されたものであり、それによってこそ自然があたかも可知の一つの全体、諸形式[形態]の開示に関わる特殊諸法則の一つの統一体(uma unidade; a unity)であるかのように眺めることが可能になるものなのである。この当惑の特権的な諸様相として生きた諸存在に関する経験、および、「これは美しい!」という判断を通じて伝えられる経験をあげることができよう。この最後の経験は、あの当惑が自らに採る最も特権的な形式[形態]である —— この当惑が、自然に関する次のような先行想定

³² [訳注]「当惑」については、「緒言」において、第一部の導入として言及がある(「序説」, p. 40)。

について生じる(というより、展開してくる)ということが与えられているとして——この先行想定というのは、自然の〈現れ[ること]〉(aparecer; aparecer[ing])の一つの様態に関するものだが、この様態によって自然{の〈現れ[ること]〉}が、芸術[技芸, 人工]作品(a obra de arte; the work of art)の〈現れ[ること]〉に近づくことになる、そういう一つの様態だ。そのようなものであるから、最初の当惑は既に、その最も源初的なイメージ——美学——から始まって配置付けられている(configurada; configured)。従って、われわれに好意を持つ[われわれを利する]時には、自然は *technê* [テクネー, 技術]として、芸術(技芸, 技術; arte, art, Kunst)として、一つの芸術作品として現れる——諸形式[形態]において過剰で豊富なものとして——が、これらの形式[形態]にとっては、理解の諸カテゴリーは絶対的に不毛である(ただ、{*Kritik der Urteilskraft*; 『判断力批判』の} §65 においては、技芸の比喩は、部分的に、生きた諸存在を理解するためには不都合であると考えられているのではあるが³³——第三部において、この困難が再びとりあげられる)。自然はわれわれに好意を持ち、われわれの眼差しによって好意を持たれているように現れるが、この相互的な好意はもう一つの第二の当惑の姿の下で実現する。

³³ [訳注]例えば次のようなくだりがある——「人は、有機的な諸産物における自然とその能力とについて、この能力を技術の類比物と名づけるなら、とうてい十分には語っていないことになる。なぜなら、そのときには人はそれらの諸産物以外の技術者(或る理性的存在)を思い浮かべているからである。むしろこの自然はおのれをみずから有機化し、全体としては一様の範例にしたがってはいるが、事情に応じて自己保存が要求する適切な例外を伴ってすら、おのれの有機的な諸産物のあらゆる種別においておのれを有機化するのである。人はおそらくこうした究めがたい固有性に、それを生命の類比物と名づけるなら、いっそう近づくことになるであろう。しかしそのときには人は、たんなる物質としての物質にその本質とは矛盾する一つの固有性(物活論)を付与しなければならないか、あるいは物質にこれと交わりを保つ異種の原理(或る靈魂)を付け加えなければならないかのいずれかである。」(原佑訳『カント選書 判断力批判』, p. 308 —— 1913年版による本訳書の AK V S. 293)

第二の当惑は好意の相互性の経験に関わるもので、それは歓喜と共に感じられ——これは実践的な活動の領域の外にある未聞の運動だ——、やはり未聞の、最初の当惑が解き放った一つの包括的な前提の性格の中に収斂している——それは合目的性の原理、一つの能力の原理だ。この能力は新たなものではないが(判断の能力[判断力]は不断に活動しており、特定の諸ケースに対して理解の諸規則を生じさせている)、実際には、あたかも新たなものであるかのように提示される。これが意味するのは、判断力は、最初は、諸形式[形態]の豊穡の、特殊諸法則の可知性(inteligibilidade; intelligibility)——統一性——の、生きた諸存在の、美しいものの奇跡の評価の自律的な能力として、現れる——これは、その固有の活動が省察[反省]的(reflexiva; reflexive)であると呼ばれる能力であり、それは、同時に諸特殊の省察の一つの行為と、それらに対してその規則を見出してやる一つの発見的な運動をも指示している。

これと次元を同じくしないのは、決定するときの判断(juízo determinante; determinant judgement)の場合における普遍的なものから個別的なものへの移行(通過)、および、反省[反射]的判断(juízo reflexivo; reflexive judgement)に帰せられる個別的なものから普遍的なものへの移行(通過)である。第一の課題は、理解の概念の適用の一つの包摂(subsunção; subsumption)そのもの、客体的な構成(constituição objectual; objectual constitution)に従属する一つの課題であり、そこでは判断力は理解の実効的な一つの表現である。第二の課題は——これまでのところ、判断力のために打ち建てられていたものの枠組みの中においては——絶対的に源初的なものであり、*Gemüth* [*Gemüt*; 心]の体系の拡張された理解にとって決定的なものである。その反省的な形式[形態]において判断力は、総ての能力の間の(特に想像力と推論[理性; razão, reason]の間の)一つの「隠されたアナロジー(analogia recôndita; recondite (hidden) analogy)」³⁴を考慮に入れ——同時にそれ[アナロジー]を推進しつつ——、その真正で自律的な本性を発

見する(それによって一つの第三の *Critica* [*Kritik* — 『批判』]のプロジェクトの完成が実行可能になったのだ)。省察[反省]は異質の諸原理に自らを従わせるわけではないし、合法[適法, 正当]性を指示できるわけでもない、つまり、その諸原理が適用されるのは単純な自然としての自然ではなく、芸術としての自然なのだ — 省察[反省]は自分自身に法則を与える — あたかも、自然の一つの意図性が、われわれ自身との関係において存在するかのように —。実際、省察[反省]的活動は、判断力の *proprium* [固有物]であり、それこそが後者を一つの自己自律的 (*heautónoma*; *heautonomisch*; *heautonomous*) な能力に変える、すなわち、判断力は一つの *Handlung* [作動]³⁵を自分自身に対して、そして自分自身のために行使するのだ — 純粋に意味的 (*puramente significativos*; *purely significative*) な

³⁴ ヴィルヘルム・フォン・フォンボルトが、そのテキスト《Über Denken und Sprechen [思考(すること)と話し(話すこと)]》[1795-1796]で、なぜ言語的諸記し^{しご}が諸音声であるかを正当化した後で用いたうまい表現だ — 「言語的諸記しは、従って、必然的な{に?}諸音声であり、人間の総ての能力の間に存在する隠された[秘密の, 内奥の]アナロジーによって[*nach der geheimen Analogie*], 一つの客体を自分から分離されたものとして分明に認識するやいなや、人間はまた直ちにそれを指示するに違いない音声を発しなければならなかったのだ。」*Wilhelm von Humboldts Werke*, 7. Bd., 2. Hälfte [*Paralipomena*], p. 582.

[訳注]《Die Sprachzeichen sind daher notwendig Töne, und nach der geheimen Analogie, die zwischen allen Vermögen des Menschen ist, musste der Mensch, sobald er deutlich einen Gegenstand als geschieden von sich erkannte, auch unmittelbar den Ton aussprechen, der denselben bezeichnen sollte.》[*Werke in 5 Bde.*, hrsg. von Andreas Flitner und Klaus Giel [Stuttgart, 1907] 5. Bd. S. 98 — 「言葉[言語]の諸記しはそれゆえ必然的に諸音声であり、また、人間の総ての諸能力の間に在る隠された類比により、人間は、一つの対象を明確に自分から区別されたものとして認知するやいなや、やはり直接的に、その対象を指示するはずの音声を発しないではいられなかったのだ。】(拙訳)

³⁵ [訳注] *Handlung* でないが、*Handeln* という語について、以下のような論述がある — 《*Kunst* wird von der *Natur*, wie *Tun* (*facere*) vom *Handeln* oder *Wirken* überhaupt (*agere*), und das Produkt oder die Folge der ersteren als *Werk* (*opus*) von der letzteren als *Wirkung* (*effectus*) unterschieden.》[*Die Kritik*

「諸客体」の領土を所有しつつ —— それは、あるいは芸術諸作品ないし芸術諸作品と理解されたものたち(われわれが生きたものたちと呼ぶところの個別的諸存在)であったり、あるいは汲み尽くせない芸術作品と観想された豊饒な総体であったりする。それゆえ、この能力の適用領域は(諸能力と心[魂]の諸力[forças da alma, forces of the soul, Vermögen des Gemüts; Seelenvermögen]の間の比較論的な枠組みの中でだが —— それが提示されているのは、あるいは *Critica da Faculda de de Julgar* [Kritik der Urteilskraft; 『判断力批判』]の「序論」の末尾において(AK V, 197), あるいは、いわゆる「第一序論」において(AK XX, 245)である³⁶), まさに芸術[技芸, 技術]の領域(あるいは芸術[技芸, 技術]作品と観想された自然のそれ)であって、自然

der Urteilskraft, §43 《Von der Kunst überhaupt》 —— 「技術は自然から区別されるが、それは、実行(facere)が働かないしは作用一般(agere)から区別されるのと同様であり、また、技術の産物ないしは帰結は、作品(opus)として、結果(effectus)としての自然の産物から区別される。」(原佑訳『カント選書 判断力批判』, 第43節「技術一般について」, p. 210)]

訳語の整理も兼ねて一覧表にすると ——

	<u>Kunst [技術]</u>	<u>Natur [自然]</u>	
	<u>Tun (facere)</u>	<u>Handeln oder Wirken überhaupt (agere)</u>	
	[実行]	[働かないしは作用一般]	
	Produkt oder Folge	Wirkung (effectus)	
	Werk (opus)		
	[産物ないし帰結]	[結果]	
	[作品]		
³⁶ [訳注]「心の全能力	認識能力	ア・プリアリな原理	適用されるもの
認識能力	悟性	合法則性	自然
快と不快の感情	判断力	合目的性	技術
欲求能力	理性	究極目的	自由
(原佑訳『カント選書 判断力批判』, 「序論」, p. 64 —— 1913年版による本訳書の AK V SS. LVIII)			
「心の能力	上級認識能力	アプリアリな原理	産物
認識能力……………	悟性……………	合法則性……………	自然
快と不快の感情……………	判断力……………	合目的性……………	技術
欲求能力……………	理性……………	同時に法則である合目的性(拘束性)……………	入倫
(原佑訳, 同上書, 「第一序論」, p. 535 —— 1913年版による本訳書の AK V S. 246)			

のそれではないが、それは、彼の神学的傾きの重要さから想定できたはずのところだ。

第二の当惑が与えられるのはあたかも感情のようにしてだ —— それは、同時に自分自身についての感情であるとともに世界についての感情だ ——。ここには歓喜の感情に対する判断力の一つの天職が発見されている —— これは諸能力の相互間について、その最も包括的な天職の特定の一つの表出として自らを開示しなければならないような天職だ —— 美的経験においては、省察[反省]に伴う、そして、それに召喚されて「これは美しい!」という判断を決定するところの歓喜の感情だ。そうした感情は(それと判断との関係はまさに判断力の原理における最も謎に満ちたものを構成するのであるが、これは一つの美的形式[形態]の出現以外のいかなる機会にも生じない関係だ —— 「序文」の末尾[AK V, 169]³⁷を参照)、われわれに好意を持つ世界との好意的な関係を表現するだけでなく、そうした相互的好意の関係は、

³⁷ [訳注]例えば次のようなくだりがある —— 「しかし判断力の本性から...容易に推測されうるのは、判断力の特有の原理を見つけ出す(なぜなら、判断力は、さもなければ一つの特異な認識能力として最も普通の批判にすらさらされることはできないゆえ、なんらかの原理を判断力はア・プリオリにおのれ自身のうちに含んでいなければならないからである)ことには大きな困難が伴っているにちがいないということであるが、判断力の特有の原理はそれにもかかわらずア・プリオリな諸概念から導出されてはならないのである。なぜなら、ア・プリオリな諸概念は悟性に属しており、だから判断力はそれらの諸概念の適用だけをめざすにすぎないからである。それゆえ判断力は一つの概念をみずから指示すべきであるが、この概念は、それによって本来いかなる物も認識されるのではなく、判断力自身に規則として役立つにすぎないものであって、しかも判断力がおのれの判断を適合させることのできる客観的規則として役立つものではないのである。というのは、それが客観的規則として役立つためには、その規則にあてはまる場合であるか否かを見分けうるために、さらにまた別の判断力が要求されるであろうからである。/原理(それが主観的原理であろうと客観的的原理であろうと)のゆえのこうした当惑は、美感的と名づけられ、自然ないしは芸術^{*}の美と崇高に関する諸判定において主として見いだされる。だがそれにもかかわらずそうした諸判定における判断力の原理の批判的な研究は、この能力の批判の最も重要な部分にはかな

諸能力間の一つの内的調和[同意; *acordo, accord*] —— 想像的な活動, 美的な意味の *Geist* [精神] (ゲーテがエッカーマンとの1831年12月21日の対話で言う通り³⁸, 生産的な意味での精神) を通じて与えられる調和[同意] —— の投影の一つの形式[形態だ]。この内的な調和[同意]はカントによって, 任意の判断の行使の条件 —— 任意の認識の形式的な条件(ただし, 美的な瞬間に最も調和のとれた[比例的な; *proporcionado, proportioned*] 様態で生じる) —— と考えられたものだ。美的活動の総ての様相の中で, この諸能力の首尾よい比例[*proporção, proportion*]が浮き彫りになる。歓喜の感情はそうした首尾よい比例の結果として, いな, よりよく言えば, 一つの形式[形態]の把握(*apreensão; apprehension*)に伴うその表出として, 現れる。自分を感じかつ形式[形態]との調和を感じる, あたかも何か一つのものが私と共に在るかのように, あるいは何か一つのものが私と共に感じるができるかのように, 私を感じる。問題になっているのは一つの共通の感情 (*um sentimento comum; a common sentiment*), 共通のものについての一つの感情

らない。」(原佑訳『カント選書 判断力批判』, pp. 24-5 —— 1913年版による本訳書の AK V SS. VII-VIII; ※[この個所への原訳者訳注] —— 「ここで〈芸術〉と訳した *Kunst* は, 自然に対する人為・人工を意味する。本訳書では, *künstlich* を主として〈人為的〉と訳出したほか, *Kunst* には〈技術〉と〈芸術〉の訳語を適宜あてた。』[p. 545])

³⁸ [訳注]《Ein einfaches Urphänomen aufzunehmen, es in seiner hohen Bedeutung zu erkennen und damit zu wirken, erfordert einen produktiven Geist, der Vieles zu übersehen vermag, und eine seltene Gabe, die sich nur bei ganz vorzüglichen Naturen findet.》[*Klassiker*, Bd. 12(39), S. 490; 「私たちは彼の『色彩論』が, なぜ, ほんのわずかだけしか広がらなかったかについて話した。『あれは人に伝えるのがたいへんむずかしいからだ。』とゲーテはいった, 『...詩や絵画の法則も, 同じようにある程度までは教えられる。だが, すぐれた詩人や画家になるためには, 天才が必要なのだ。ところが, これは教えるわけにはいかないものだ。簡単な根源現象をとりあげて, その高次な意味を認識し, それを活用するには, いろいろなことを大局から眺められる創造的な精神が要求されるが, そういう才能はめったにあるのではなく, 本当にすぐれた人たちにしかみられないのだ。』(エッカーマン『ゲーテとの諸対話』岩波文庫, (中)pp. 306-7)]

(um sentimento do comum; a sentiment of the common)だ。

そして第三の一つの当惑がゲームに参加する。それは、一つの共通の調和[同意]および世界についての一つの共通の感情の発見から生じる当惑だ。諸当惑の進展は同時にそれら諸当惑の解消の道でもある、つまり、芸術作品としての自然には何か任意の他者としての私(自我)の感情が対応するのだ。一つの技術[uma técnica]の視点から見られると、自然は、感情的には、自らをコミュニケーションへの道として見出し、かくて、合目的性の原理の移行、——つまり、*sensus communis* [共通感覚、共通の意味・意識](好意的な一つの世界、好意的かつ好意を示しつつあると感じられる一つの世界、一つのコミュニティー[共通性、共同性]の中にあると好意的にも感じられる一つの世界、あるいは、一つの共通の好意的な世界の感情³⁹)への移行——を実現する。

かくて、共通のもの(o comum; the common), 一つの Gemeinsames [共通のもの]の可能性こそ(これは執拗に、美的判断の総ての分析に、色々な様態[vozes; voices]で定式化されて現れ続ける)、総ての諸調和[同意]の基礎にあるものだ——それは、間主観性として、つまり、何であれ他のものの場所への移行の運動として、決定される共通のものだ。*Sensus communis* とは一つの意識(感覚)であり、分割(分与)の一つの感情、各々の一者の他の各々との再統一(合一)の場所、および、それゆえまた各々の一者の自分自身との再統一(合一)の場所でもある。

任意の認知的な行為の大局的な諸条件がこの一つの共通の世界の可能性、および認識の感情的および反省[省察]的な一つの形式の実効性に統合されている。その意味は、諸当惑のあの三つの次元が、初めて、く意味を与えるこ

³⁹ *sensus communis* の枠組みの中での「一つの共通の好意的な世界」のテーマの展開については、カウルバッハの次の著作を参照—— Friedrich Kaulbach, *Ästhetische Welterkenntnis bei Kant* [『カントにおける美的世界認識』], Königshausen und Neumann, Würzburg, 1984, pp. 137-145。

と)の純粋な活動としての思考を眼に見えるようにする——客体化する運動へのいかなる訴求もなしに——ということだ。問題になっているのは、パラドシカルにも、〈感じること〉の一つの形式[形態]、〈影響されること〉(これは積極的なことである)の一つの形式[形態]であり、一つの受容(これは活動、解釈、認識である)の一つの形式[形態]である——意味はそのコミュニケーションを通じてコミュニケートされ伝えられるのだ。もし世界が私に一つの生きた〈全体〉——その特殊な諸形式[形態]において、およびその特殊な諸法則において、自分自身に統一されている——として現れるとするならば、人間たちは、生きたものとしてとられた、そして共通のものとなった一つの世界の感情のうちに自らを凝視する一つのコミュニティー[共同体]として現れる。

ただ、芸術作品としての、および共通の感覚[意味]としての一つの世界のこの間-主観的な関係においてのみ、判断力はその完全な統一性を得る。そのようにして、決定のためのその利用(o seu uso determinante; its determinant use)は、あの純粋な活動の一つの特定の種類として——その真の自律を(諸客体の体系としての世界の方に自らを動かしつつ)変更する一つの特定の種類として——、考えるべきである。ここから、カントが、*Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』]の始めの部分だけが、実際に、*Gemüth* [心]の一つの再構成を義務づけるということを強調する——そして新たな一つの『批判』の必要性を支持して論じる——という事実の正当化が出てくる(なぜなら、美的判断に捧げられたその部分においてだけ、判断力が他の{-}能力のいかなる制約からも独立に作用するからだ——しかも、自らをその他総て[の諸能力]に、一つの未聞の調和的な連関によって結びつけつつ——)。諸能力の間の——想像力と理解力[悟性]、想像力と理性の間の——一つの一定の幸運な比例性としてのその固有の内的な性向により、判断力は、諸親近性の再統一(合一)へと、それらの理解へと向かう傾向がある。初めて言語(ランゲージ)との一つの連結が現れる——それは、思考

自体の構成的エネルギーとして把握され、直感と概念との、およびイメージとアイデアとの伸長的(tensional)な不可分性を目指す——。可視的なものから不可視的なものへの定まった(運命的な; *destinadas; destined*)諸移行、任意の一[一者、一つのもの]から任意の他のもの[他者]への、一つの能力から他の能力への、主体から世界への、定まった諸移行(これらの移行は、言語[ランゲージ]全体にわたって働き、そして詩歌においてはその完熟に達し、哲学においては大きな問題状況に達する、反省[省察]的な活動によって助けられる)は、判断力の、非客体化的[*não objectivante; non-objectifying*]な使用に内在的な解決的、調停的な運動の印した。目的論的な判断は、理論的-認識的な一つの問題(この問題は、理解力[悟性]の純粋な諸範疇の枠組みの中では読解性は見出せないだろう)の解決の一つの試みとして現れるが、そうした目的論的な判断とは反対に、美的判断は判断力の源初性を贖い、それに新たな理解を賦与する——というのは、これは一つの理論的問題の一つの変異でもなければ一つの実際的問題の一つの変異でもないのだが、しかも、それらの調停の条件であるのだ—— けだし、一方では、美しいものは善きもの(善)のシンボルであり、他方では、諸能力の間に推進された調和[同意]は—— その比例性は同一ではないものの——、いかなる認識行為においても現存するものだからである——。

Kritik der reinen Vernunft [『純粹理性批判』]は、その理論的関心のモデルとして物理学的-数学的な経験をとるのだが、その際、そのために経験の全体性の領域を決定することを—— その構成の様態を証示しながら—— 止めはしない(それを縮減しはするが)、それと同じように、*Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』]もまた、美的経験を理論的および実際的諸経験との関係で自律化しようと狙いつつ、美的なものを他の諸領域にまで拡張することを止めることができない—— というのも、美的なものは主観性の感情的な構造の図式であるだけでなく、間-主観性の、つまり、諸能力の互いに対する、および、諸主観性の互いに対する、天職の感情的な構造の図式でもある

からだ。

2. ゲーテにおける一つの *Gemeinsames* [共通のもの] の追求の再現実化。判断力のゲーテ的な変形。可視的/不可視的の関係。直感的概念 (*o conceito intuitivo*)。Aperçu (*Anschauen* ; 観照・直感[すること]) および *Urphänomen* [(根) 原現象] の表明。諸能力の構造化と機能。共通の中心点 (*o ponto central comum*) —— 先行想定と諸帰結。主体/客体の関係 —— 自律と共本性性 (*co-naturalidade* ; 本性を共にすること) —— これは、一つの承諾の感情と事物の印しとの再統一を通じて伝えられる。この枠組み内における *gegenständige Denken* [对象的(な)思考(すること)] の構成。

2. もしも、思考[思想]の王国が不可視のものたちの王国ならば、一つの直感的な思考、あるいは、その中では〈直感すること〉の行為がその諸対象から(形式[形態]としての諸顕示から)分離されていないような一つの思考、その中では直感の一つの思考として自らを表現し、思考は自らを直感として聖化するような一つの精神的活動の形式[形態]は、諸不可視物に可視物の王国を通じて接近する傾向があり、さらにまた、この中に諸不可視物への接近の可能性を見出す傾向がある —— その際、思索能力と自然とに同時に存する再統一化の一つの原理(隠された一つの法則)を予兆しつつ ——。これらがゲーテの形態学適プロジェクトを導く諸確信であった。彼が人間の諸能力の働き方、その範囲、その諸関係を見た様態の中に、われわれは一つの最初の展開を見るのである。

理性も理解力[悟性]もゲーテにおいては決定的なものではない —— 彼はその批判的区別を我が物としたとはいえ ——。それは、諸特殊へ、諸顕示 [開示, 現象 ; *manifestações, manifestations*] へ自己適応し、あるいは、それら諸顕示の間の調和を図り、全体性の原理としての理性の超越的な概念の拡張を目指すために、彼が論理的-言説的な知に対して内在的に不適切であることを強調するものだ。しかし、彼が理解力[悟性]のカント的な特性付け

に固執するとしても —— それ[特性付け]を強化しつつ ——，われわれは彼が批判的な思考によって課せられた諸制約を超えるのを見る —— と言うのは、理性は、聖性への接近としてのその前-批判的な理解に引き戻されているのだから —— 〈全体〉を情熱的に求める程度に応じて、優れてシンボリックな運動である理性は自らの聖なるものとの親近性を証示するのだ。その瞬間には、それは一つの光り輝く形姿 (*uma feição luminosa; a luminous feature*) を獲得するのだ。

以下のことを証明するのは興味深いことだ。すなわち、ゲーテ的な思考[思想]に対する批判に伝統的に対抗する大きな論争は、一つの直感的な知の可能性をめぐる打ち建てられているのだ —— そうした知性は、実際、ゲーテの場合には、人間的な認識構造の実効的な諸制約を超える一つの能力としてよりは、むしろギリシャ的 *nousu* [ヌース]の更新された変形としてとるべきなのだ。そうした反対論は、パラドシカルにも、シラーによって、*malgré lui* [彼の意に逆らって]、1794年8月23日の有名な手紙によって先鞭をつけられたのだ。その若干の文を引用しよう —— 「私には、思索的な種々のアイデアのための客体が、身体が、欠けているのですが、貴方は私をしてその諸痕跡の中に置いてくれたのです(...) 貴方の正確な直感の中にはそうしたものの総てがあり、それも、分析が力づくで求めるものよりはもっとずっと完全な仕方ですが、それももっぱら、これが貴方の中で、一つの〈全体〉である如くであるが故に、貴方自身の王国が貴方に対して隠されているのです。というのも、不幸にも、私はただわれわれが分離するものだけを認識するのですから。従って、貴方のそのような諸精神は、めったに、どの点まで穿入したかを、また、稀にしか、哲学に借財を申し込む必要性を知ることはない —— 哲学はただそれらの精神とともに学ぶことができるだけなのですが ——。このもの[哲学]はただそれに与えられたものを解体することができるだけであり、その〈与えること〉の行為自体は分析的な事柄ではなく、むしろ天才 (*genio*) の事柄で、それは、純粋な理性の暗い隠れた ——

確固としてはいるが —— 影響の下で、客観的な諸法則に従って総合するのです(...)貴方は自然の必然的なものを追求されますが、しかしそれを最も困難な道に沿ってそうされます(...)自然の全体性をまとめて、独特のもの(o/the singular)に光を当てることを目的にとりあげます(...)最も簡単な組織から始めて、貴方は一步一步自らを高め、他のもっと複雑な諸組織に到り、最後に、自然の建物の全体性の素材から出発して、総ての組織の中でも最も複雑なもの —— 人間 —— を、遺伝[発生]的に打ち建てようとするのです」(HA/Ba, 1, pp. 164-165)⁴⁰。

⁴⁰ [訳注]《Mir fehlte das Objekt, der Körper, zu mehreren spekulativischen Ideen, und Sie brachten mich auf die Spur davon. Ihr beobachtender Blick, der so still und rein auf den Dingen ruht, setzt Sie nie in Gefahr, auf den Abweg zu geraten, in den sowohl die Spekulation als die willkürliche und bloß sich selbst gehorchende Einbildungskraft sich so leicht verirrt. In Ihrer richtigen Intuition liegt alles und weit vollständiger, was die Analysis mühsam sucht, und nur weil es als ein Ganzes in Ihnen liegt, ist Ihnen Ihr eigener Reichtum verborgen; denn leider wissen wir nur das, was wir scheiden. Geister Ihrer Art wissen daher selten, wie weit gedrungen sind, und wie wenig Ursache sie haben, von der Philosophie zu borgen, die nur von ihnen lernen kann. Diese kann bloß zergliedern, was ihr gegeben wird, aber das Geben selbst ist nicht die Sache des Analytikers, sondern des Genies, welches unter den dunkeln, aber sichern Einfluß reiner Vernunft nach objektiven Gesetzen verbindet./... Sie suchen das Notwendige der Natur, aber Sie suchen es auf dem schweresten Wege, vor welchem jede schwächere Kraft sich wohl hüten wird. Sie nehmen die ganze Natur zusammen, um über das Einzelne Licht zu bekommen; in der Allheit ihrer Erscheinungsarten suchen Sie den Erklärungsgrund für das Individuum auf. Von der einfachen Organisation steigen Sie, Schritt vor Schritt, zu den mehr verwickelten hinauf, um endlich die verwickeltste von allen, den Menschen, genetisch aus den Materialien des ganzen Naturgebäudes zu erbauen. Dadurch, daß Sie ihn der Natur gleichsam nacherschaffen, suchen Sie in seine verborgene Technik einzudringen.》[「私には多くの思弁的な諸理念に対して客体が、身体が欠けていましたが、貴方が私をその諸痕跡の上にもたらせて下さいました。貴方の観察的な眼差しは、諸事物の上にも静かにかつ純粹に置かれているのですが、それを貴方は決して、脇道に陥る危険に晒すことはありません —— その道

以上と同等であるが、「直感的概念」[o conceito intuitivo; der anschauende Begriff, intuitive concept]という表現は、カント的な観念の一つの取り込みと解されるべきではない——これは把握された実在そのものの創造的な概念を指示するものではないからだ——直感的概念とは、むしろ、理解する[学ぶ]ことと把握することとの間の総合の一つの形式[形態]に関するものだ。因みに、それ[上述の表現]は想定され得るよりは稀にしか現れないのだが、それへの言及で最も著名なものの一つはザクセン-ゴータ侯(o Duque [der Herzog Ernst II.] von Sachsen-Gotha)への1780年12月27日の書簡である——「寓話も物語[歴史]も、教義も意見も彼[観察者]が直感するのを阻止すべきではありません——それは、彼が自分の見たものを、彼が想定し、結論づけるものから細心に分離するようにするためです。正確に^{ぶんかく}分画さ

へは思弁も恣意的で自分自身にしか畏敬を抱かない想像力も共に余りにも容易に自ら迷い込むのですが——。貴方の正しい直感の中には、分析が苦勞して追求するものが総て、そしてはるかに完全に存在しており、しかも、もっぱらそれが一つの〈全体〉として貴方の中に存しているがゆえに、貴方には貴方御自身の富が隠されているのです。と言うのは、残念ながらわれわれは、われわれが分離するものだけを知っているからです。貴方のような類の諸精神は、従って、めったに、自らがどれほど突き進んでおり、哲学から施しを受ける謂れがいかにか少ないかを知ることがないので——哲学の方こそそれらから学ぶことができるのです——。このもの[哲学]はただ、自分に与えられたものを分解することができるだけで、その〈与えること〉自体は分析者の事柄ではなく、天才のそれであり、天才は、純粋な理性の暗い、だが確かな影響の下で客観的な諸法則の方に結び付けられているのです。/…貴方は自然の必然的なものを追求する、それも最も困難な道で求めるのであり、それは、それに対しては弱い力なら身を守らなければならないような道です。貴方は全自然を纏めてとって個別的なものを照らす光を求めます。その現象の仕方の総体の中に貴方は個物[個体]のための解明根拠を追求します。単純な組織から、一步々々より込み入ったものの方へ上昇して、貴方は最後に総てのものの中でも最も込み入ったもの——人間——を、遺伝[発生]的に、全自然の諸構造の諸素材を素にして組み立てようとします。貴方は人間を言わば自然に倣いつつ創り出すことを通じて、その[人間の]隠された技術の中に穿入することを追求します。』(拙訳)

れた各々の観察は、後続の者にとって計り知れない価値を持ち —— 後者に遠く離れた諸事物の直感的諸概念を与え、彼自身の経験の総量を増やしてやり、そして最後に、色々な人間から出発して、いわば一つの〈全体〉を構成するのです —— (...)これらの事物においては、他の何千という事物においてと同じく[この場合は諸山岳の起源だが]、科学的概念に対して、直感的概念が無限により好ましいとすべきです。私が一つの山の中に —— その前に、あるいはその中に —— 居るとき、私はその諸地層、諸岩脈の配置、タイプ、潜在性を観照し、いわばあたかも生きていくかのように、その構成的な諸部分と形態を、その配置と自然的な状況において喚起するのであり、ここにおいてこそ、直感することの生きた行為に伴って、魂の中に一つの暗い合図が感じられるのです —— それでは、そういう具合だったのか! これが生まれたのは、それでは、そういう具合にしてだったのだ! —— それに対して、それについては、私は収集した小さな標本たちを通じては、そして他方では、諸結果の過剰な一般化を通じては、ほんの僅かしか伝達することができないのです](HA/B, 1, pp. 336-337)⁴¹。

⁴¹ [訳注]《Weder Fabel noch Geschichte, weder Lehre noch Meinung halte ihn ab zu Schauen. Er sondere sorgfältig das, was er gesehen hat, von dem, was er vermuthet oder schließt. Jede richtig aufgezeichnete Bemerkung ist unschätzbar für den Nachfolger, indem sie ihm von entfernten Dingen anschauende Begriffe gibt, die Summe seiner eigenen Erfahrungen vermehrt und aus mehreren Menschen endlich gleichsam ein Ganzes macht. ... Bei dieser, wie bei tausend ähnlichen, ist der anschauende Begriff dem wissenschaftlichen unendlich vorzuziehen. Wenn ich auf, vor oder in einem Berge stehe, die Gestalt, die Art, die Mächtigkeit seiner Schichten und Gänge betrachte und mir Bestandtheile und Form in ihrer natürlichen Gestalt und Lage gleichsam noch lebendig entgegenrufe, und man mit den lebhaften Anschauen so ist's einen dunkeln Wink in der Seele fühlt so ist's erstanden! wie wenig kann ich freilich davon mit den abgebrochenen Musterstückchen und den wieder auf der andern Seite zu generalisirten Durchschnitten überschicken.》[「寓話も歴史も、教義もまた見解も、彼が直感するのを妨げるべきではありません。それは彼が細心に、自分が見たも

直感的概念は、まず第一に、寓話と物語[歴史]に対置され——この二つは、諸障害の最初の一対だ(物語[歴史]はここでは、単に寓話に近い意味でだけ解釈されるべきではなく、慣習を通じて、また時間を通じて聖化された諸意見-観察の複合体としても言及されているのであり、かくて、ゲーテがそれに、もっと後になって帰さなければならなかった意味からは優に離れている——特に *Die Metamorphose der Pflanzen* [『諸植物の変態』]および *Materialien zur Geschichte der Farbenlehre* [『色彩論史への諸原資料』]で帰した意味で、それは一方では変態[転態]の概念に、他方では科学自体の構成に、直接に結びついた意味である——ここで科学の意味[意味されるもの、シニフィエ; *significado, the signified, signifié*]は、後に見られるように、われわれの間で自然なものになっている概念に同化するこはできないのだ)——、さらにまた、もう一対の障害、つまり、教義および意見にも{直感的概念は}対置される。それらの諸障害の同定を通じてゲーテは自分の批判を想像力および理解力[悟性]の一つの用法に向けていた——それ[想像力および悟性]は、巧妙さとともに大いなる性急さをもって、諸観察の間の連絡の欠如を、不当に正常化するとともに満たすのだ——「幻想的なもの(

のを、想像したかあるいは結論したものから区分けするようにするためです。各々の正しく輪郭の描かれた観察は後統者にとって計り知れない価値があるのですが、それは、遠隔の事物について直感的な[直感する]概念を与え、彼自身の経験の総量を増し、こうして、多くの人々から最後に、言わば一つの〈全体〉を造るからです。...ここにおいては、他の千もの他の似た場合におけると同じく、直感的な概念は科学的な概念に対して無限により良いものとしなければなりません。私が一つの山の上、前、ないしその中に立って、その諸層および諸岩脈の形姿、種類、力強さを観察し、その諸構成部分と形態がその自然な形姿と状態において、言わばなお生きているかのように私の方に呼びかけるとき、人は生きいきした直感〈そうだ、これはそうなのだ〉とともに、魂の中に暗い合図〈そうだ、これはそうして生じたのだ!〉を感じるのですが、それについては、私はもちろん、もぎ採られた小さい標本の諸碎片によっては、はたまた他方では、一般化された諸平均によっては、伝えることはできないのです。)(拙訳)

fantástico; the fantastic)と理想[理念・観念]的なもの(理想・理念・観念; o/the ideal)との差異, 正当なこと(o legitimo; the legitimate)と仮設[説]的なこと(o hipotético; the hypothetical)との差異を把握する術を知らない者は, 自然の研究者としては, 悪しき状況にいるのだ。「諸仮説は, 理解力[悟性; o entendimento, understanding]と想像力が観念の位置に自らを据える時に生じてくる」(*M.u.R.*, 558および559, p. 441)⁴²。この形式[形態]の想像力は, 實際上, 非真正の一つの注目の結果であって, それは自分の造りあげたものの諸変形と現実の諸関係を混同するのだ。問題になっているのは, 想像力の一つの用法で, それは自ら辛抱強い観察にとって代わる傾向があり, 自分の活動自体の素材に自らを転換してしまうような用い方なのだ。ゲーテは, 他の多くのテキストにおいて, 想像力の一つの概念を展開しているが, それは, 判断力および<観念[理念]形成すること(idear; ideate)>—— 理性 —— の精神的な力の表現と不可分であり, 総ての<見ること>と総ての<言うこと>の条件に自らを転じているような想像力だ。

そのようであるから, 一つの観照が実現されることが出来るためには, 観察者が, 注意深い<く><見つめること>が自らを完全に活動させるのを妨げる

⁴² [訳注]《Wer den Unterschied des Phantastischen und Ideellen, des Gesetzlichen und Hypothetischen nicht zu fassen weiß, der ist als Naturforscher in einer üblen Lage.》《Es gibt Hypothesen, wo Verstand und Einbildungskraft sich an die Stelle der Idee setzen.》[「想像と理念, 法則と仮説の区別を把握する術を知らぬ者は, 自然研究者としては困ったものだ。」「理解力と想像力が理念の代りになっているような仮説がある。」(岩崎・関訳, p. 285); 「幻想的なものと理念的なものとの区別, 法則的なものと仮設的なものとの区別を把握する術を知らない者は, 自然研究者としては一つの悪い位置に居ることになる。」「或る種の諸仮説があって, そこでは悟性と想像力が理念の位置に取って代わっている。」(拙訳)]

(参考)《Eine jede Idee tritt als ein fremder Gast in die Erscheinung, und wie sie sich zu realisieren beginnt, ist sie kaum von Phantasie und Phantasterei zu unterscheiden.》[*M.u.R.*, 541, S. 439 —— 「どのような理念も, 見知らぬ客として現象のなかへは行って行く。そして現実化し始めるや否や, 空想や妄想とはほとんど見分けがつかなくなる。」(岩崎・関訳, p. 285)]

内的な諸制約から自らを自由にする必要がある。先行想定と結論は単に無用だけでなく、危険でもあることが顕示される——それは、不断に発生機の状態にある一つの観察にとって代わるような場合だが、それによって、観照されると主張されるまさにそのものを失うという危険が冒されるのだ——。「私は、一つの厳密で利害を超越した[無心の]科学が観察に対して障害を構成するという主張からは程遠い。われわれは自分が知っていることに對してだけ眼や耳を持っていると言う古い格言には一理あります(...)しかし、科学の領域ではまたわれわれは、科学および仮説の力にまかせて、もはや見る態勢も聞く用意もない諸人物に出会うものです(...)。自然の観察の一部分を成すのは、何物によっても乱されもせず攪乱もされない内面の一つの一定の静謐な純潔さです」とゲーテは、三十年以上後(1824年5月18日, AA, 24, p. 556)のエッカーマンとの対話で言っている⁴³——慣習的にそう

⁴³ [訳注]《Weit entfernt aber bin ich, zu behaupten, daß ein ungfangenes *rechtes* Wissen der Beobachtung hinderlich wäre, vielmehr behält die alte Wahrheit ihr Recht, daß wir eigentlich nur Augen und Ohren für das haben, was wir *kennen*.》[*Klassiker*, Bd. 12(39), S. 538]《... stoßen wir auch in der Wissenschaft auf Leute, die vor lauter Gelehrsamkeit und Hypothesen nicht mehr zum Sehen und Hören kommen.》[S. 538] 《Es gehört zur Naturbeobachtung eine gewisse ruhige Reinheit des Innern, das von gar nichts gestört und präokkupiert ist.》[S. 539 —— 「だが私は、捕らわれない正しい知識が観察の妨げになると主張することからはかけ離れているどころか、むしろ、われわれは本来、自分が知っていることに對してのみ見る眼と聞く耳を持っているという古い真理は失われていないのだ。...われわれは学問の世界でもまた、全くの学殖や諸仮説を前にして、もはや見ることにとも聞くことにとも及ばないような人々に出会うものだ。...自然の観察には、全く何物にも乱されず、心を奪われることもない内面の一つの一定の静謐な純潔さが必然的なものだ。】(拙訳)；「...ゲーテは言った、『...多くの聡明な人たちは、たぶん、身辺を自分で観察するようになるだろう。そして、われわれを取り囲む身近な自然からこうしてひとりひとりが観察し得たことは、多くの場合その観察者が実際の専門家でなければならないほど、それだけ値打ちのあることだね。』/『あなたが遠まわしにおっしゃろうとしていられるのは、』と私は答えた、『知識があればあるほど、観察がだめになるということのように思えますか?』/『旧来

であるように、自分の源初的[素朴]な諸確信を沈澱させつつ —— つまり、まさにその初心^うさこそが、「科学的概念」が浪費するものだが、それは、常にあたかもそれが初めての時であるかのように見つめるという性向に固執できなかったことの帰結なのだという確信を ——。従って、ここに一つの方法的体系[秩序；*uma ordem metodológica, a methodological order*]が要請される —— それは、総ての一般的概念の、総ての部分的抽象の、総ての還元的な諸命題(つまり諸仮説のことで、この名称は、慣習的に、方法的な諸形態としての誤謬、惑乱、気まぐれを聖化するものだ)の留保を含意する。しかしそれは、導きの観念が無くても何であれ観察できるということを意味してはいない。それ無しには観察は、それ自身の諸当惑にすらも顧慮することが

の知識に、誤まちが結びついている場合には、...もちろんそうだよ。科学にたずさわる人は、なんらかの偏狭な信条にとらわれてしまうと、たちまち素直で正確な理解ができなくなる。...およそ融^う通のきかない一つの方向にとらわれているこういった理論家の世界観というのは、素朴さを失ってしまっていて、事物はもう自然のままの純粋な姿では現われてこないのだ。そこで、こういう学者たちがその観察を解説するとなると、ひとりひとりの真理を愛する心はこよなく感じられても、われわれには事物の真実の姿がどうしてもつかめないということになる。それどころか、われわれが受取る対象ときたら、じつに甚だしく主観の入りまじった好みによるものばかりなのさ。...{けれども、私は、自由な正しい知識が観察を紡げるなどと言い張るわけではけっしてないのだよ。むしろ、われわれに目や写があるのはじつは知るためなのだ、という昔ながらの真理は依然として正しいと思うのさ。}専門の音楽家は、オーケストラの合奏に臨んでも、ひとつひとつの楽器、ひとつひとつの調べを聞きわけると、素人は全部一緒になった効果にとらわれてしまう。...しかし、どんなものにも限度があり限界というものがある。...{科学の世界でも、学問や仮説にばかり夢中になって、もうまるで目も耳も利かなくなってしまうような連中がいるよ。}こうした連中にかかったら、なにもかもすぐに我田引水にされてしまう。...{自然を観察するには、何ものにも紡げられず、先入見にとらわれない心の静かな清らかさでもいうべきものがどうしても必要だね。}子供は、花にとまった甲虫を逃さないし、その全神経をただ一つの単純な興味に集中する。...』/『それですから、...子供たちや子供みたいな人たちというのは、科学の分野では、まったく立派な助手の役目を果たすわけなのですね。』(エッカーマン『ゲーテとの諸対話』岩波文庫、(下)pp. 55-7; { }内が該当箇所]

なく、自らを消散しつつ独りで興奮することになろう。観念は一つの認識的衝動に表現を与え、これが事物への忠実性を義務づける —— ということは、つまり、予感決して生きた経験に代替せず、それに随伴するということである ——。

上述の書簡のテキストにおいて証明されているのは(その日付 —— 1780年、イタリア紀行の前で、その自然研究との関係でのいかなる決定的な決意もの以前だ —— によって与えられる指示以外に)、決定的な諸専心の一つの提示だ —— これは、その未来の展開の予告としてかくも明瞭な仕方を通過するので、われわれは今、ゲーテが(ほとんど観相学的に)彼自身の思考[思想]の輪郭を、その紛うことのあり得ない一つの形式[形態]を押し付けながら素描している瞬間に立ち会っていると想定させられるのだ —— *und man mit dem lebhaften Anschauen so ist's einen dunklen Wink in der Seele fühlt so ist's erstanden!*⁴⁴ しかしながら、われわれはこの *dunklen Wink* について自分を欺かないことにしよう。直感的概念が含むのは、多かれ少なかれ不分明なヴィジョンというよりはむしろ、一つの〈知覚[すること](um perceber; a perceiving)〉 —— これは後の諸テキストでは一つの *Aperçu* ないしは一つの完全に実現された *Anschauen* の行為の輪郭をとる ——、一つの源初的で正確な〈知覚すること〉 —— これは行為しつつ生きている起源を (*Urphänomen* [源現象]を予兆しつつ)、それに起源を与えるそのものの中に包括する —— である。

因みに、それこそがゲーテの自然への諸関心の中心である —— つまり、発生(遺伝; a *gênese*; *genesis*)の過程、および成長における発生の継続(*porossecução*; *continuation*) —— これが転態を通じて発生自体を開示し完成させる —— である。魂の中で感じられる暗い合図(*o aceno*; *der Wink*,

⁴⁴ [訳注]そして人は生き生きとしたそれはそうなのだという直感と共に魂の中で、そのようにしてそれは生じたのだという暗い合図を感じる。

the wink)は、実際、統一体を形作り、その際、〈全体〉はその[統一体の]構成[配置]の中で構成され、可視のものとなる(現れる限りにおいて、誰かに対して現れる限りにおいて、自らを証示しつつ)——一つの瞬間から別の瞬間への、一つの形態から別のそれ(諸山岳の諸地層および諸鉱脈の構成諸部分、形式[形態]、潜在力、タイプ[型])への移行[通過]の運動を通じて——。魂の中で感じられる暗い合図は、事実、注目を通じて、記述を通じて、良く分画^{ぶんかく}された観察を通じて保証された同意の経験を示すのだが、これは、一つの承認の感情とその事物自体の一つの印しとの間の接触の、いな、{偶然的}一致ですらの、一つの形態に照応するものだ——しかしながら、それが一つの還元的な同一視であることなしに——。

しかしながら、ゲーテが、一つの直感的な知らないしは一つの直感的概念について語ることは、その頻繁さにおいては(また決定的調子においても)、直感的判断力[*anschauende Urteilskraft*]および独自の・源初的諸現象(諸原現象; *os fenômenos originais, originários*⁴⁵; *Urphänomen*)についてほどではなかったのだ——後者は、現象の起源、独特の(original)条件で、その現象自体の中に観照され、可視的なものが与える諸垣間見の中に現れるものだ。実際、もしもゲーテにおいて思考するに価する精神の一つの力が有るとすれば(そして彼はそれを模範的に行使したのだが)、それは判断力である——つまり、意思決定の能力であり、これは統一するために区別し、区別するために統一するもので、同意、調和を追求するもの、諸独自性を記述し比較するものであり、それは「諸対話中心(*os centros coloquiais; the colloquial centers*)」(エウドロ・ドゥ・ソウザ, *op. cit.*⁴⁶, §56, p. 116がそう呼んだもの)——諸イメージと諸シンボルのことだ——の行使の場所である。

⁴⁵ [訳注]ポルトガル語には、*original*(*pl. originais*)という語と *originário* という語がある(「序説」, 脚注29を参照)。「独創的、独特の」および「源初的」などと訳し分けることがある。

⁴⁶ [訳注]脚注10を参照。

判断力は想像能力(a *faculdade imaginativa*; the *imaginative faculty*)と緊密な関係にある。この場合、想像能力は方向を誤らせる幻想としてでなく、感覚可能なもの(o *sensível*; the *sensible*)との不可分の結合において(ゲーテだったらそれを *Sentimentalität* [感情(感傷)性]の一つの形式[形態]だと言っただろう)、それ[感覚可能なもの]を精神化させ、またいわば和解させて伝える諸形態を生産する力のある精神的な力(o *ânimo*; *spirit*, *soul*)としてとられている。この{想像能力との緊密な}関係において判断力は、一瞥で周りを見回し(*umhersehen*)、観念と感覚可能なものとの結合を捉え、理解し、独特なもの(o/the *singular*)の中で活動している普遍的なものを知覚することに適性を持っているのだ。

諸親近性を比較し、再統合し、評価し、それと戯れることの活動、諸類似を活性化し、深化させることの活動、諸類比を見出すことの決定的な活動は、認知的構造の経済の中に占める判断力の中心的な位置を浮き彫りにする。判断することの活動が実現するのは一つの媒介的な、曖昧模糊たる(両義的な; *amfibológico*; *amphibological*)、両性具有的な道においてであり、それは<在ること[存在]>と<現れ[ること]>との間に広がる道であり、<現れ[ること]>に嗜好を持ち、その{<現れ[ること]>}の中に<在ること[存在]>を追求するような道だ。ハンナ・アーレントは *The Life of Mind, I — Thinking* と *Lectures on Kant's Political Philosophy* で、正確に、一つの啓発的なしかたで、判断、評価、嗜好(o *gosto*; *taste*, *Geschmack*)の間のあのカント的な結合を証示した。この嗜好というのは、実際には、若干の注解者たちが想定するように、一つの世紀の良き嗜好(センス)の付随的な効果などではなくて、反対にそれは、<評価すること>の行為を<味わうこと>の行為として構造化する生きた諸結合の理解の結果であり、それによって判断力の発見的な本性が顕示される^{てい}体のものである。この力は多様性の発見の能力であり、この発見は、その美的な用法では、味わわれ、検証されるものだ(一つの果実についてのように)——これは最も内奥の経験、そして、パラドク

シカルにもコミュニケーションに訴え、それを約束する経験であり、博愛の完成された形態だ(*Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』] §60 に *humaniora* [人文学]という語で指示してある[AK V, 355]⁴⁷⁾ ——。ゲーテにおいては、その結合は、歓喜の、衝動の、エネルギーの観念を包括する、そして、認知的行為を特徴づける *geniessen* [享樂・享受する]という動詞の用法が聖化する総ての用語を通じて継続的かつ明白に強調してある⁴⁸⁾。

⁴⁷⁾[訳注]「すべての美的芸術のための予備学は、最高度のその完全性がめざされているかぎり、準則のうちにあるのではなく、古典文学 *humaniora* と名づけられている素養による心の諸力の開化のうちにあると思われる。多分その理由は、人間性は、一方では普遍的な関与感情を、他方ではおのれを最も誠実に普遍的に伝達することのできる能力を意味するからであろう。これらの固有性は、いっしょに結合されて、人間性にふさわしい社交性をつくりあげるが、この社交性によって人間性は動物の狭隘性から区別されるのである。」(原佑訳、『カント選書 判断力批判』、「第六〇節 付録 趣味の方法論について」, p. 283 —— 1913年版による本訳書の AK V S. 262)

因みに、*humaniora (studia)*は、語源的には、「より[あるいは、最も]人間的な(研究)」の意味である。

⁴⁸⁾ ウルリッヒ・プレツェル(Ulrich Pretzel)はその論文《Wortbedeutungsproblem in Goethes Sprache [ゲーテの言語における語義の問題]》, *Kritische Bewahrung. Beitrag zur Deutschen Philologie. Festschrift für Werner Schröder*, hrsg. v. Ernst Joachim Schmidt, Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1974, pp. 416-433)で、ゲーテの語彙の多くのキーワードは、現に固定されている意味から出発しては厳密には理解することができないことを証明している。*geniessen* の場合がそれで、それはゲーテによってなお、〈享受する〉の意味としては、*Vorteil* [利点]、*Gewinn* [利得]に近い意味論的領域でも使われている。しかし、認知的行為との関係で、*geniessen* から、享受する、味わうという意味を引き離すことはできないのだ。このことは他の諸表現を通じて確証される —— 例えば、*Lust zum Wissen* [知ることの悦楽] (*Farbenlehre*, Einleitung [『色彩論』序文], HA 13, p. 222)¹⁾、および、*Da ich nach meiner Art zu forschen, zu wissen und zu geniessen mich nur an Symbole halten darf* [私が私の流儀で研究し、知り、そして私を楽しませるためにただ諸象徴に留まることが許されているだけなので](...)》(*Die Lapaden* [蟹類の一種], *Morphologie*, HA 13, p. 206)²⁾。

[訳注]1) 《Die Lust zum Wissen wird bei den Menschen zuerst dadurch angeregt, daß er bedeutende Phänomene gewahr wird, die seine Aufmerksamkeit an sich ziehen. Damit nun diese dauernd bleibe, so muß sich eine innigere Teilnahme

存在するものを通じて直接的に影響を受け得る (affectável [pl.-táveis]; affectable) ような受容の諸様態である想像力(想像; a imaginação; the imagination) と感覚性は、理解力[悟性]の、および理性のそれとは次元の異なる諸能力である。それらは、存在するものを魂に対して現前させるものであり、他方では、より厳密に想像力の場合には、あの関係を、一つの強力な仲

finden, die uns nach und nach mit den Gegenständen bekannter macht. Als dann bemerken wir erst eine große Mannigfaltigkeit, die uns als Menge entgegen dringt. Wir sind genötigt zu sondern, zu unterscheiden und wieder zusammenzustellen, wodurch zuletzt eine Ordnung entsteht, die sich mit mehr oder weniger Zufriedenheit übersehen läßt.》; 「人間に知的な欲求が初めて萌してくるのは、その人間が重要な現象に眼をとめ、注意を惹かれたときである。この知的な欲求が持続するためにはさらに深い関心が生じてこなければならぬが、われわれが対象に次第に通暁できるようになるのも、それがあってこそである。そのときわれわれがまず認めるのは、大量に押しよせてくる大なる多様性である。そのためわれわれはこれを分類したり区別したりしてから、再びそれを統合する必要に駆られる。そうしたとき初めて、いくばくかの満足感をもって眺められるような秩序が誕生するのである。」(『色彩論[完訳版]』第一巻「教示篇・論争篇」, p. 26) 原著の p. 222 の表記は 322 の誤記。

- 2) 《Wer das Glück hatte, diese Geschöpfe im Augenblick, wenn das Ende des Schlauches sich ausdehnt und die Schalenwerdung beginnt, mikroskopisch zu betrachten, dem müßte eins der herrlichsten Schauspiele werden, die der Naturfreund sich wünschen kann. Da ich nach meiner Art zu forschen, zu wissen und zu genießen mich nur an Symbole halten darf, so gehören diese Geschöpfe zu den Heiligtümern, welche fetischartig immervor mir stehen und, durch ihr seltsames Gebilde, die nach den Regellosen strebende, sich selbst immer regende und so im kleinsten wie im größten durchaus gott- und menschenähnliche Natur sinnlich vergegenwärtigen.》[「この生き物[Lapaden]を、それが管の先が伸びて殻形成が始まる瞬間に顕微鏡的に観察する幸福を持った人にはそれは、自然愛好者が望み得べき最も壮麗な見世物の一つだろう。私が私の流儀で研究し、知り、そして私を楽しませるには、ただ諸象徴に留まることが許されているだけなので、これらの生き物は、私の前に常に神神的に現存する聖域に属するものであり、その稀な構造によって——それは規則の無いものへ向かって志向しつつ、常に自らを規則に従わせ、巨細にかかわらず一貫して神および人間に似た本性を現前させるのだ——。】(拙訳)

介(*uma mediação; a mediation*)に —— 堰止められていない時に、可視のものへの性向を持った一つの時に —— 転換するための適性を持っており、その際、その強い力を、事物の未聞の一つの認識に先行する諸影響(*as afecções; the affections*)を明示的に再興するところの生産的な諸形式[形態]に移行させる。われわれに想起されることだが、感覚性は *Kritik der reinen Vernunft* [『純粹理性批判』]においては、本来は一つの能力(*uma faculdade; a faculty*)ではなくて、一つの許容力(容量, 能力; *uma capacidade; a capacity*)であり —— このことは、その可塑的で影響を受け得るその痕跡を強調するものだ ——、また *Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』]においては、明示的には言及されていないが、それは、いわば、想像力に統合され、それに同化されているからだ。われわれは、想像力の色々な力と、精神的諸能力の複合へのそれらの有機的な統合との一つの驚くべき総合 —— それはこの主題を巡るカントの思考[思想]の最も決定的な諸相を解明し光を当てるものだ —— に遭遇するのだが、それは、ゲーテが{ワイマール}大公(嗣子)妃マリア・パウロヴナ(*Grä-Duquesa [Erbgroßherzogin] Maria Paulowna*)に宛てた1817年1月3日付けの書簡の付録[apêndice; appendix, Beilage]においてであって、これは、カント哲学の21節への一つの要約(神学者で哲学者のフランツ・ヴォルクマル・ラインハルト[*Franz Volk(m)ar Reinhard*]の手になる)の送付に付随したものだ。ゲーテには §3 に一つの大きな欠落があるように思われたのだが、ここでは、われわれの表象力の主要な諸能力が提示されている —— すなわち感覚性、理解力[悟性]および理性であるが、想像力[*a imaginação; Phantasie, imagination*]が欠けているように思われたのだ。この欠落への批判を展開しつつ、ゲーテは続ける —— 「それ[想像力]は感覚性を記憶の形式[形態]の下で代替し、理解力[悟性]に対して世界のヴィジョンを経験の形式[形態]の下で提示し、理性と精神 —— かくして人間の統一性の全体 —— の諸観念に対しては諸形式[形態]を構成しあるいは見出してやるのですが、これ[人間の統一性]はそれ無しには悲惨な痴

呆状態に沈みこまざるを得なかったことでしょう。そこで、もしも想像力がその三つの姉妹の諸能力に対してそのような奉仕を為すものであるなら、それと対偶の関係において、それが真理の、および実在性の王国に導入されるのは、ただ、これらの愛すべき身内を通じてのみでしょう。感覚性は彼女に純粋な仕方で一定の輪郭を与えられた諸形式[形態]を与え、理解力[悟性]はその生産力を統制し、理性はそれに対して、虚構の諸ヴィジョンと戯れているのではなく、反対に、諸観念に基づいているのだということの完璧な保証を与えるのです。」(HA/B, 3, p. 385)⁴⁹。ゲーテにおいては感覚性、諸感覚[感覚された(感覚可能な)ものたち ; os sentidos, senses, the sensed]は精神

⁴⁹ [訳注]「Im §3 scheint mir ein Hauptmangel zu liegen, welcher im ganzen Laufe jener Philosophie merklich geworden. Hier werden als Hauptkräfte unseres Vorstellungsvermögens Sinnlichkeit, Verstand und Vernunft aufgeführt, die Phantasie aber vergessen, wodurch eine unheilbare Lücke entsteht. Die Phantasie ist die vierte Hauptkraft unsers geistigen Wesens, sie suppliert die Sinnlichkeit, unter der Form des Gedächtnisses, sie legt dem Verstand die Welt-Anschauung vor, unter der Form der Erfahrung, sie bildet oder findet Gestalten zu den Vernunftideen und belebt also die sämtliche Menscheneinheit, welche ohne sie in öde Untüchtigkeit versinken müßte./ Wenn nun die Phantasie ihren drei Geschwisterkräften solche Dienste leistet, so wird sie dagegen durch diese lieben Verwandten erst ins Reich der Wahrheit und Wirklichkeit eingeführt. Die Sinnlichkeit reicht ihr rein umschriebene, gewisse Gestalten, der Verstand regelt ihre produktive Kraft und die Vernunft gibt ihr die völlige Sicherheit, daß sie nicht mit Traumbildern spiele, sondern auf Ideen gegründet sei./ Wiederholen wir das Gesagte in mehr als einem Bezug! — Der sogenannte Menschen-Verstand ruht auf der Sinnlichkeit; wie der reine Verstand auf sich selbst und seinen Gesetzen. Die Vernunft erhebt sich über ihn ohne sich von ihm loszureißen. Die Phantasie schwebt über der Sinnlichkeit und wird von ihr angezogen; sobald sie aber oberwärts die Vernunft gewahr wird, so schließt sie sich fest an diese höchste Leiterin. Und so sehen wir denn den Kreis unserer Zustände durchaus abgeschlossen und demohngeachtet unendlich, weil immer ein Vermögen des andern bedarf und eins dem andern nachhelfen muß./ Diese Verhältnisse lassen sich auf hundertfältige Weise betrachten und aussprechen — z.B.: Im gemeinen Leben treibt

uns die Erfahrung auf gewisse Regeln hin, dem Verstand gelingt es zu sondern, zu verteilen und notdürftig zusammenzustellen und so entsteht eine Art Methode. Nun tritt die Vernunft ein, die alles zusammenfaßt, sich über alles erhebt, nichts vernachlässigt. Dazwischen aber wird unablässig die alles durchdringende, alles ausschmückende Phantasie immer reizender, je mehr sie sich der Sinnlichkeit nähert, immer würdiger, je mehr sie sich mit der Vernunft vereint. An jener Grenze ist die wahre Poesie zu finden, hier die echte Philosophie, die aber freilich, wenn sie in die Erscheinung tritt und Ansprüche macht von der Menge aufgenommen zu werden, gewöhnlich barock erscheint und notwendig verkannt werden muß.》[SS. 384-6 — 「カント哲学の全体の進みのなかで明らかになった主要な欠陥が第三章にある... われわれの表象能力の主力として、感性、悟性、理性があげられておりますが、想像力が忘れられているために治しがたい欠陥が生じております。想像力はわれわれの精神の第四の主力であって、記憶という形で感性を補っております。それは、経験という形で、悟性に世界を観照させます。またそれは、もろもろの形象を理性的理念に形成する、あるいは、形象を見出してこれを理念たらしめます。したがってそれは総体としての人間に活気を与えるものであって、それなくしては人間は索漠とした無能におちいる他ないであります。/さて想像力が三人の姉妹にこうして力を貸しますと、今度はこの三人に助けられて想像力ははじめて真理と現実の国に導き入れられることとなります。感性ははっきりと輪郭のきまった形象を想像力に差し出します。悟性は想像力の独創的な力を規制し、理性は安全な確実性を与え、こうして想像力が幻影とたわむれずに、しっかりと理念に基礎づけられるようにいたします。/いま申したことをもう少し具体的に説明してみましょう。—— いわゆる人間の悟性は感性にもとづいております。純粋な悟性がそれ自身とその法則にもとづいているのと同様であります。理性は悟性をのりこえますが、悟性から切りはなされることはありません。想像力は感性の上に浮かんでいて、感性に引きよせられます。けれども想像力が、上のほうに理性があるのに気がつきますと、それはこの最高の導き手にしっかりと結びつきます。こうしてわれわれの存在圏が完結しながら、しかも無限に開かれているのがわかります。それは、一つの能力が他の能力を必要とし、一が他を補って助けてやらなければならないからであります。/こういう事情は無数の仕方で見ることができ、これを表現することもできます。—— たとえば、日常生活では、経験に促されてわれわれはある規則にたどりつきます。悟性はこれを分け、配置し、必要により組み立てることに成功しますが、こうして一種の方法が生まれます。そこへ理性が入ってきます。理性はすべてをまとめ、すべての上に立ちながら、何一つゆるがせにすることがありません。しかし一方で、すべてをつらぬき、すべてを飾りたてる想像力は、それが感性に接近するにつれて不断に魅力の度を加えますし、それが理性と結びつく

ことによってますます威厳あるものとなります。前者の究極のところには真のポエジーが見出されますし、後者の究極のところには真の哲学があるでしょう。が、もとより、哲学が現象界に入ってきて、多衆に受け入れられようという一要求をかけたとき、それは通常奇異な観を呈し、どうしても誤解されずにはすまなくなります。」(小栗浩訳『ゲーテ全集 15 書簡その他』, pp. 188-9) ; 「私には §3 に主要な欠落が在り、それがあの哲学の全行程を通じて顕著になっているように思われます。ここでは、われわれの表象能力の主要な諸力として感覺性、悟性および理性があげられています、しかし幻想力[想像力]は忘れられており、それによって、治癒不能の間隙が生じています。想像力はわれわれの精神的存在の第四の主要能力で、それは感覺性を補い、諸記憶の形式[形態]の下でそれは悟性に対して世界直感を提示し、経験の形式[形態]の下でそれは悟性に対して世界直感を提示し、経験の形式[形態]の下でそれは理性諸理念に対して諸形姿を形成ないし見出してやり、かくして、総体としての人間の統一性に活力を与えますが、それ無しには、これは荒涼たる不的確さにうち沈んでいたに相違ありません。/さて、想像力がその三人の姉妹諸能力にそのような奉仕を行うとき、それに対して彼女の方もこれら愛すべき身内たちを通じて初めて真理および現実性の王国に導き入れられるのです。感覺性がその純粋に分画された確かな諸形姿に達し、悟性がその生産力を統制し、理性がそれに、それは夢幻の諸像と戯れているのではなく、諸理念に基礎付けられていることの完全な保証を与えます。/上述のことを幾つかの点について繰り返しましょう! —— 所謂人間悟性は感覺性に依拠しているのに対し、純粋な悟性は自分自身とその諸法則に依拠しています。理性は、自らを悟性の上に高めつつ、それから自らを切り離すことはありません。想像力は感覺性の上部に漂い、それに惹き付けられますが、しかし、それが上方における理性に気づくやいなや、彼女はこの最高の導き手に堅く身を寄せます。そこでわれわれは、われわれの諸状態の環が完全に閉じられており、しかも、にもかかわらず無限であるのを見ます —— なぜなら、常に一つの能力が他を必要とし、一方は他方の援助に赴かなければならないのですから。/この関係は、何百という仕方でも観察され、表出されています —— 例えば、日常の生活で、経験がわれわれを一定の規則の方へ押し遣り、悟性は、それを選び分け、配分し、応急的に統合することに成功します。ここで理性が介入し、それは総てを総合し、自らを総ての上に高め、何物も閑却されたままに残すことをしません。しかしこの間絶え間無く、総てに穿入し、総てを潤色している想像力が、自らが感覺性に近づけば近づくほどますます刺激的になり、自らが理性と同盟すればするほどますます威厳あるものになります。前者の境界上において真の詩歌が見出されますが、後者においては真正の哲学がありますが、もちろん、それが現象の中に歩み入り、大衆に受け容られるという要求をなす場合には、普通は、奇怪なものに見え、必然的に否認されなければなりません。」(拙訳)

的な結合により結び合わされており、自らを諸能力に転換する傾向があるが、想像力はそれらの感じ得る諸力の招集と拡張的で再-生産的[再現的；re-productiva, re-productive]な実施の一つの仕掛けだ。しかし、ゲーテもまた想像力と感覚性との相違について主張しており、前者には創造的でかつ自然と競合する諸力を帰し、その模倣的な親近性を証示し、後者については、その受動的な性格を強調する——その性格は自らを自然諸力の下に埋もれさせるが、それは《Poetische Metamorphosen [詩的諸転態]》と題された死後公刊のテキストにおいて述べられている通りだ——「想像力[Phantasie (幻想)]は感覚性よりもずっと自然に近いところに在り、後者{感覚性}は自然の中に封じられていおり、前者は{想像力}は自然の上を漂っている。想像力は自然の高さに在り、感覚性はそれに支配されている」(LA I, 10, p. 251)⁵⁰。この枠組みの中では判断力は一つの特別の、唯一の面に位置されるが、それは、統一性へ向かう精神の一つの不可抗力の運動から出発するからで、この運動は想像的な諸行為によって支持される。

エルンスト・シュティーデンロートの著作(Ernst Stiedenroth, *Psychologie zur Erklärung der Seelenerscheinungen* [『精神諸現象の解明のための心理学』], Berlin, 1824)への書評でゲーテは、同書の著者は、彼[ゲーテ]自身が、極めて少壮の時から自らの内に伝えていた確信を最も巧い形で定式化するのに成功していると見なしている。それは、魂の上位の諸力と下位の諸力との間の区別立てをすることの誤謬についてであるが、それは、それらの諸力は、それぞれが互いの中に自らを反映し、一方の拘束は他方の窒息に導くからだ——「人間精神においても、宇宙におけると同じく、何物も上位にも下位にも無く、総てのものが、同等の正当さをもって、一つの共通の中心

⁵⁰ [訳注][WA II. 6(70), S. 361にもある——「想像力は感覚性よりもずっと自然に近いところにある——後者は自然の中に在るのに対して、前者はその上を漂っている。想像力は自然と融合しているのに対して感覚性はそれに支配されている。」(拙訳)

点 (um ponto central comum; ein gemeinsamer Mittelpunkt; a common central point) を要求するが、この中心点は、その秘密の存在を、まさにそれと総ての諸〈部分〉との調和的な関係を通じて開示する」(HA 13, p. 42)⁵¹。まさにこの{共通の中心}点こそが(未知ではあるが認識可能かつ予想可能であるが)、再統一し、調和[同意]を育み、その{調和の}理由を与えるものだ——魂の諸力を活気付け、それらを存在する総てのものとの関係で方向づけつつ——、と言うのは、その共通の中心点は、宇宙において、および魂において{偶然に}符合するからであって、それはあたかも、総ての諸〈部分〉間に一つの調和が不断に働いて、一つの譜面に常に自らを——厳格な規則に従うことを無視しない一種の即興として——作曲しているかのごとくである。総ての理論的な諸対決は、実際、諸能力——感覚性と理性、想像力と理解力[悟性]——の隔離、およびそれらの一方的な使用、ないしはそのあるものたちの他のものたちへの優勢{特権視}に起源を持っているのだ。総てのことが信じさせるのはこのことだ、つまり、あの *gemeiner Mittelpunkt* は——精神の法則自体のように——一つの生産的なエネルギーと、放射する一つの源と、同一視できるということだ——それは、同時に、精神の諸力を再統一すると共に刺激するもの、判断力が想像力の諸操作を通じて現実化するエネルギーだ——「ゲーテにおける認識は理解の総ての人間の諸能力の一つの和合 (concordia; concord) に、一つの再均衡に同化されていなければならず、それらを相互の戯れの中で高め、純化しつつそうするのだ。この豊穡への、および統一への愛を欠く認識は総べて、真である (verdadeiro; true) と呼ばれるに値しない」⁵²。思考は再生産[再生]を先行想定するというシュ

⁵¹ [訳注]ドイツ語原文とその訳は、序説、脚注94を参照。なお、すぐ後に出てくる *gemeiner Mittelpunkt* は、原文では *gemeines Mittelpunkt* と、中性形で出てくるが、男性形に改めた。

⁵² Erich Heller 《Goethe and the Idea of Scientific Truth》, in *The Disinherited Mind. Essays in Modern German Literature and Mind*, The Penguin Book, London, 1961, p. 19.

ティーンロートの観念は、ゲートによって、思考の王国と〈詩作すること〉および〈想像すること〉の領域との間の近縁性(contiguidade; contiguity)、連鎖、緊密な結合の露呈として理解されている——あたかも前者が後者の中に流れ注ぎ、その中に自らを開くがごとく——。この〈認識すること〉と〈生産すること〉の諸様態の相互的な効果性は、諸能力の諸活動の相互の上への拡散という形で、同上書 p. 140の、ゲートによって引用された箇所で提示されている——「思考は、従って、いわば無から出発しては自らを処理せず[processar-se; process itself]、むしろ、十全であるはずの一つの前-形成(pré-formation; pre-formation)を、一つの前-結合(pré-conexão; pre-connection)を先行想定するのであり、そしてここで、厳密な意味で〈思考すること〉が存在する場合には、事物に照応する諸表象の一つの結合、一つの秩序が先行想定されるのであり、それを通じて必然的な統合性が明白なものになる」(*idem*, p. 43)⁵³。〈思考すること〉と〈再興すること (restituir; restitute, restitution)〉とのそのような不可分性、精神の運動と事物の一つの表現との

⁵³ [訳注]《... das Denken Reproduktion voraussetzt. Die Reproduktion richtet sich nach der jedesmaligen Bestimmtheit der Vorstellung. Auf der einen Seite wird daher für ein tüchtiges Denken eine hinreichend scharfe Bestimmtheit der gegenwärtigen Vorstellung vorausgesetzt, auf der andern Reichtum und angemessene Verbindung des zu Reproduzierenden. Diese Verbindung des zu Reproduzierenden, wie sie für das Denken taugt, wird selbst größtenteils erst im Denken gestiftet, wiefern aus mehrerem das Entsprechende eine besondere Verbindurg durch das nähere Verhältnis seines Inhalts eingeht. Das tüchtige Denken in jeder Weise wird daher ganz abhängen von der Zweckmäßigkeit der Reproduktion, deren man fähig ist. Wer in dieser Hinsicht nichts Rechtes vorrätig hat, der wird nichts Rechtes leisten. Wessen Reproduktionen dürftig sind, der wird Geistesarmut zeigen, wessen Reproduktionen einseitig sind, der wird einseitig denken, wessen Reproduktionen ungeordnet und verworren sind, der wird den hellen Kopf vermissen lassen, und so im übrigen. Das Denken also macht sich nicht etwa aus Nichts, sondern es setzt eine hinreichende Vorbildung, Vorverbindung und da, wo es Denken im engern Sinn ist, eine der Sache entsprechende Verbindung und

間の生きた結合は、一方では予想(予感, 予兆; *antecipação, anticipation*)の主題を呼び起こし、他方では、それに結びついた一つの可塑的な理性の先行想定を導入することになる。

この観念の中にわれわれは、*Kritik der reinen Vernunft* [『純粹理性批判』]のモットーの、展開中の一つのヴァリエーションに再会することになるのだが、それらは数ページ前に諸当惑として言及されたものだ。調和[同意]はカントにとっては偶発的なものだ、つまり、それは感知し得ないので客体化できないものだが、この主題はゲーテにおいては不断に発見の素材であり、総てを統一する絆、未認識ではあるがあらゆる瞬間に自らを提示している法則、諸形式[形態]とのどの遭遇においても認識可能な法則であり、各々の *Aanschauen* [観照, 直感]の行為において自らを確証するものだ。そして、まさにそのようなのは、彼にとっては、認識とは、特殊[なもの]の中における、独特[独自]なものの中における、普遍[的なもの]の認識であり、各々の独自のものは成長における一つの形式[形態]であるからだが、それは自

Ordnung der Vorstellungen voraus, wobei sich die erforderliche Vollständigkeit von selbst versteht.》[「思考は再現[再生, 生産, 模写]を前提する。再現はその時々表象の規定性に自らを向ける。それゆえ、一方では、堅実な思考にとっては、現存の表象の一つの充足的で先鋭な規定性、他方では、再現さるべきものの豊穡と適切な結合とが、前提される。この再現さるべきものの結合は、思考に役立つ限りにおいては、それ自身が大部分、思考において初めて創作されるのだ——若干のものの中から、相応するものが、その内容のより近い関係を通じて一つの特別の結合の役を引き受ける限りにおいて——。だが、堅実な思考はあらゆる仕方で、それゆえ、人が能うる限りの再現の合目的性に全く依存している。この点で何ら正しいものの蓄えを持たない者は何事も正しいことを行うことはないだろう。その諸再現[表象]が乏しい者は一面的に思考するだろうし、その諸再現[表象]が秩序だっていざ混乱している者は明晰な頭脳の欠如を嘆かせるだろう、等々、以下同じ。{思考はそれゆえ何か無から自らを造るのものではなく、一つの充足的な前形成、前結合を前提するものであり、厳密な意味での思考が存在するところでは、一つの事柄に相応した諸表象の結合と秩序とが前提とされるが、その際、必要な完全性は自明のことなのだ。}」(拙訳; { }内が引用箇所)]

らの到来を一つの汲みつくし難い照応の条件下でもたらずのだ。もしもカントにおいて自然が、判断力の視点からして、あたかも芸術であるかのように考えられているとすれば、ゲーテにおいては同じく逆の類比により、芸術作品を生きた存在[生きて存在している]として主題化すること、そして認知的活動を同時に美的活動に近縁のもの、自然に内在的な生きたプロセスの拡張としても理解することを見る。かくて、美的活動の諸結果が認知的活動の上落ちることについては、カントにおいて起こった以上に決定的なものがあるが、それは、ゲーテが一つの共通の起源の確実さから出発するからだ。

あの調和[同意]には、上で見たように、一つの満足が結びつく——反省[省察]的認識は歓喜に伴われているのだが、これは世界の、そして自分自身の享受の一つの特権的な様態だからだ——。先行想定されているのは次のことだ——すなわち、カント的な意味での反省[省察]は、(ゲーテ的に)美的行為として捉えられ、そして——一つの危急かつ確信の時における——一つの *Mittelpunkt* [中心点]の追求を通じて最も賞賛すべき様態において自らを伝える認知的行為のための手段として役立つのだ。《*Einwirkung der neueren Philosophie* [最近の哲学の影響]》というテキストでは、自分と哲学との——特に超越的哲学との——関係の平衡をとるにあたって、ゲーテはまさに、カントが芸術の、および自然の諸産物を、ただ単に狭い意味で現れた (*aparentados; having appearances*) ものとっていただけでなく、それらを判断力の下に再統一していたことを発見したときの喜びについて語っている(cf. *HA* 13, p. 27)⁵⁴。疑いも無く、まさにこれらの、*Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』]において継統的に召喚されていた *Übergänge* [諸移行]へこそ、ゲーテは感受性を示していたのだった。

判断力は、それ自体としての独自のなものたちと自らを関係させる——それらの独自の輝きを受容しつつ——という天職を持っているので、その

⁵⁴ [訳注]引用は脚注20にある。

各々の中に自分自身の開示、およびその形成の法則を構成するものの開示に出会う傾向がある。精神の一つの力が自分自身の予感と、現れて[現象して]いる事物の合図とを調和させる瞬間に、現れる[現象する]事物の各局面は、それ自身が自ら、次の局面の予感に、および先行する局面の痕跡に転化し、それぞれのステップに固有の発生的観念を証示していく、ということは、現れる[現象する]事物は自らが現われ(現象; *aparição*; *apparition*)に転化するということだ。それゆえ、判断力は単に一つの仲介的な道の上で働くだけでなく、それ自身が仲介的な能力であり、あの *Mittelpunkt* [中心点]の表出的な実現なのだ。

諸特殊[特殊なものたち]のこの天職の内部でこそゲーテの具体的思考(*o pensamento concreto*; *the concrete thought*) [*gegenständliches Denken* (対象的思考)]が内的に自らを構成するのであり、その中では、それ自体としての現象の価値、およびそれ自体としての現象の記述の価値が浮き彫りにされる——その基礎を背後にも下部にも求めず、従って、基礎の弁証法を拒否しつつ——。この思考の実現は、逆に、現象とその意味付け(意味指示; *significação*, *signification*)との不可分性を証示しており、この現象の意味付けを象徴として受け容れるが、それは現象が自分自身について認識させるべく与えるもの、現象が証言するものの意味においてそうなのだ。

自分を対象へと放棄すること——しかも同時にそれをその宿命[目的地]へと導くことなく(詩人がそうするようには)、また力が学問的に決定することなしに(諸科学がそうするようには)——、それは、その真の成就を決して見出さない一つの努力の諸輪郭をとる放棄の一つの形式[形態]だ。ゲーテが没頭した諸対象、世界の存在の諸形式[形態]、および芸術および詩歌(*poética*; *poetics*)によって造り出された諸形式[形態]は、生への通過(移行)が、彼がヴィンケルマンについてのテキストで言ったように、約束され得ない、あるいは、仮りに約束されたとしても実現困難だろうようなその場所に彼が留まるのを妨げていた。主体/客体の関係は具体的思考によって粉末化

されはしないし、否定の諸酸に晒されはせず、むしろ、還元され得ないだろうもの(一方ないし他方の自律)と、同属性(congenitura; congeniality)であることを自己開示するもの(主体および客体の共-本性性[co-naturalidade; co-naturality])との間の驚くべき結合である——主体は客体に同等であり、幾らかそれ以上であるし、客体は主体に同等であり、幾らかそれ以上であることは、シュロッサー(Christian Heinrich Schlosser)に、1815年5月19日の手紙で、既に言及した *Máxima* 『箴言』] 515におけるよりは複雑に再確認する通りだ(*HA/B* 3, p. 304)⁵⁵ ——

⁵⁵ [訳注]《... will ich mein allgemeines Glaubensbekenntnis hierher setzen./ a. In der Natur ist alles was im Subjekt ist./ y. und etwas drüber./ b. Im Subjekt ist alles was in der Natur ist./ z. und etwas drüber./ b kann a erkennen, aber y nur durch z geahndet werden. Hieraus entsteht das Gleichgewicht der Welt und unser Lebenskreis in den wir gewiesen sind. Das Wesen, das in höchster Klarheit alle viere zusammenfaßte, haben alle Völker von jeher *G o t t* genannt. Ihre Stellung, mein Freund, gegen die vier Buchstaben scheint mir folgende zu sein: Sie geben a zu, und hoffen es durch b zu erkennen, Sie leugnen aber das y, indem Sie es durch eine geheime Operation in das z verstecken, wo es sich denn wohl bei einer Untersuchung auch wieder herausfinden läßt. Die Notwendigkeit der Totalität erkennen wir beide, aber der Träger dieser Totalität muß uns beiden ganz verschieden vorkommen.》[「私の全般的な信条告白をここに添えましょう。[a~z 訳中略]b は a を認識することができますが、しかし y は z を通じてのみ予兆できるだけです。ここから、世界の平衡、および、われわれがその²⁰矩を超えないよう指示されているわれわれの生の範囲が生じます。上述の四つを総べて、最高の明瞭さで統括している存在を、あらゆる諸国民が爾来、*神*と名づけてきた。貴方の(友よ)四つの項目に対する立場は、私には次のようなものだと思います——貴方は a はまあ認め、そしてそれを b を通じて認識することを欲するが、しかし貴方は y を否定し、貴方はそれを一つの秘密の操作を通じて z の中に忍び込ませるのです——確かにそれはそこで、一つの研究の際に再び見出されはするのですが、全体性の必然性はわれわれ二人が共に認識するのですが、この全体性の担い手はわれわれ二人には全く異なったものとして現れざるをえないのです。】(拙訳；引用・訳とも下線は訳者の挿入)]

書簡日付は原典では5月でなく2月になっている。*Maxima* 515については脚注27を参照。

- 「a. 自然の中には主体の中に在るものの総てが在る
 y. そしてさらに、それより幾らか多くのものがある。
 b. 主体の中には自然の中に在るものの総てが在る
 z. そしてさらに、それより幾らか多くのものがある。
 b. は a. を認識することはできるが、y. はただ z. を通じて予兆され
 得るだけです。ここから世界と、われわれが自らを捧げている生の
 範囲との間の平衡が生じます。」

ゲーテの心を占め、彼を専心させているものは、一つの理論的観点からすれば、その詩的生産において彼には一つの宿命として与えられてあると思われたものであった——つまり、存在するものの現われ、例えば、人間と自然に応え、取り扱い、調整する、魂と世界に穿入する諸力の一つのヴァリエーションの現われである——それこそが力[権能、権力; *poder, power*], 力[勢力; *força, force*]であり(これは、1775年2月[13日]のアウグステ・ツェー・シュトルベルク伯爵夫人[*Auguste Gräfin zu Stolberg*]宛の手紙でゲーテは、自分の諸感情を諸能力に転換させる処方として特徴づけている⁵⁶),

⁵⁶ *Dichtung und Wahrheit* [『詩と真実』]の第二部巻頭のコピー「*Was man in Jugend wünscht, / hat man im alter die Fülle* [若き日の願いは、年老いてのち、豊かに満たされる(河原・山崎訳『ゲーテ全集 9 詩と真実 第一部・第二部』, p. 192)]」を、能力と予兆との関係の説明の特権的な様態として解説しつつ、ゲーテ自身が、予感の理論という枠組みの中でそれに省察的な振幅を与えている——「われわれの諸欲望はわれわれの中に存在する諸能力の諸予兆、われわれが実現する能力のあることの諸予告である。われわれの想像力はわれわれに対してわれわれの外で、そして、将来において、われわれがすることができかつ望むものを提示する——われわれは既に沈黙において所有しているものへのノスタルジアを感じるのだ——。」*Dichtung und Wahrheit*, 2. Teil, 9. Buch, HA 9. p. 386*. この一文については、エルンスト・カッシーラーの注釈を参照——Ernst Cassirer, *Freiheit und Form*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1961, p. 192. さらに、シュロッサーへの書簡からの引用についてのフェルディナンド・ヴァインハンドルの自著での解説については次を参照——Ferdinand Weinhandl, *Die Metaphysik Goethes* [『ゲーテの形而上学』], Junker und Dünhaupt Verlag, Berlin, 1932, pp. 218-242.

それは、比喩、生産的な詩的修辞が実現に成功するものであり、彼の形態学的思考[思想]においてわれわれは繰り返し同じ諸動機に出会う——すなわ

[訳注]※《Unsere Wünsche sind Vorgefühle der Fähigkeiten, die in uns liegen, Vorboten desjenigen, was wir zu leisten imstande sein werden. Was wir können und möchten, stellt sich unserer Einbildungskraft außer uns und in der Zukunft dar; wir fühlen eine Sehnsucht nach dem, was wir schon im stillen besitzen. So verwandelt ein leidenschaftliches Vorausergreifen das wahrhaft Mögliche in ein erträumtes Wirkliche. Liegt nun eine solche Richtung entschieden in unserer Natur, so wird mit jedem Schritt unserer Entwicklung ein Teil des ersten Wunsches erfüllt, bei günstigen Umständen auf dem geraden Wege, bei ungünstigen auf einem Umwege, von dem wir immer wieder nach jenem einlenken.》[SS. 386-7 — 「私たちの願望は、うちに存する能力の予感であり、私たちのいずれ成就しうることの先ぶれである。私たちのできること、したいことは、想像力に委ねられて、私たちの外に、未来にあるものとして描きだされる。私たちは心の底にすでにひそかに蔵しているものに憧憬を感じているのである。それで熱情をもってあらかじめ先取りされるからこそ、真に可能なものが夢想された現実と化するのである。このような方向がはっきりと私たちの本性のなかにあれば、一步一步発展するにつれて最初の願望が一部ずつみたされ、私たちは順境に恵まれれば真っ直ぐな道を経、逆境にあれば迂路をとりながらも、たえず直線コースへ立ち戻ってすすんでゆく。】(同上訳書, p. 342)

シュトルベルク伯爵夫人への手紙 — 《... weder rechts noch links fragt, was von dem gehalten werde was er [=Goethe] machte? weil er arbeitend immer gleich eine Stufe höher steigt, weil er nach keinem Ideale springen, sondern seine Gefühle sich zu Fähigkeiten, kämpfend und spielend, entwickeln lassen will.》[HA/B 1, S. 177 — 「けれどももう一人のゲーテもいるのです。...自分の作品を人がどう思うかなどと左右をかえりみたりすることはありません。努力によっていつも一段ずつ高くなるのほり、理想めがけて一挙にとびあがろうなどとは考えずに、戦いかつたわむれながら、自分の感情を能力にまで発展させようとしているからです。】(小栗浩訳『ゲーテ全集 15 書簡その他』, p. 49) ; 「彼が作ったものについて何が言われているのか? と右顧左眊することはない。なぜなら、彼は仕事をしつつ常に言わば一段だけより高く登るからであり、如何なる理想を目指しても跳び付かず、自分の諸感情をして諸能力に、闘いつつかつ戯れつつ発展させるのですから。】(拙訳)

なお、原書では o Conde von [Friedrich Leopold Graf zu] Stolberg (フリードリッヒ・レオポルト・ツー・シュトルベルク伯爵)宛の手紙となっているが、HA/B に従って訂正した。HA/B 1, SS. 176-8.

ち、数多性の経験、一つの統一原理(この原理によって起源と転態(生成; dev[en]ir, transformation, becomming)が一つの共通のものにおいて再合一することとが可能になる——その生成自体の中における起源の認識を通じて——)の存在の確信だ⁵⁷。

主体と客体の間の、諸能力の間の、成長の種々の相の間の、一つの形式[形態]の成長の異なった諸瞬間の間の——{各項の}自律を決して無化しない諸照応を追求すること、それは<部分>の、瞬間の尊厳の認識に、またその各々の中に、再統一を可能にし、シンボリックな様態で与えられる——諸形式[形態]の間の相互的な親密さを、そして他のレベルで主体と客体との間の親密さを発見しつつ——紐帯を見出す確実さに等価である。客体として採られてく<在ること (ser; being)>と、客体にく<自らを同化すること>、<適合させること>、それを<その個性性の中に編み込むこと>との間の連鎖の中にこそ、その網目の中にこそ、主体と客体の間の、諸形式[形態]の間の鍵で現にある (estar)⁵⁸ものだ——一方のものたちが他方のものたちの中で、一方のものたちが他方のものたちを通じて、あたかも諸経^{たていと}と緯^{よこいと}のように(これは、ゲーテがフンボルト宛1832年3月17日書簡[HA/B 4, p. 480]——まさに彼の死の前に書かれた最後の書簡——で告白するように、*das ich so gerne brauche* [私が極く喜んで使う]ような直喩だ)⁵⁹、諸存在の穿入

⁵⁷ ヴェルター・ベンヤミンが *Ursprung* [根源, 起源]の概念を、生成(起源; devir, becomming)のそれとの関係で展開した様態、つまり、諸言葉[言語]の、芸術的諸形式[形態]の構成の可能性の構成的な原理としての、そして歴史的時間の認識の枠組みの中におけるその展開は、特に、上述の《Die aufgabe des Übersetzers [翻訳者の課題]》, *Der Ursprung des deutschen Trauerspiels* [『ドイツ悲劇の根源』], および《Übe den Begriff der Geschichte [歴史の概念について]》I. 2, pp. 691-704でなされたそれは、このゲーテ的な概念の適切でもあれば独創的でもある一つの理解を巡ってたたずんでいるのだが、それは言わば、それを十全な表現へと高めることになっているのだ。

⁵⁸ [訳注]ポルトガル語における be 動詞の2種類 (ser, estar)の区別については「序説」の脚注89を参照。

(penetração; penetration), *Durchdringung* はこの相互編み込みの理解から出発する——すなわち、各々の客体は他の客体の開示、イメージ、他の客体への接近になる——これは、観想された一つの源初のもの (*um primeiro, a primary*), すなわち、未認識の法則だ——。

参考文献

MOLDER, Maria Filomena

O Pensamento Morfológico de Goethe, Imprensa Nacional-Casa da Moeda, Lisboa, 1995. [502pp. 本訳稿の底本]

GOETHE, Johann Wolfgang

GOETHES WERKE. Hrsg. im Auftrag der Grossherzogin Sophie von Sachsen, Weimar, Hermann Böhlau Nachfolger, 1887-1914. 4 Abteilungen mit insgesamt 133 Bänden (in 143) [*Weimar Ausgabe* — *WA*].

Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche, hrsg. von Ernst Beutler, 24 Bde, Artemis Verlag, Zürich, 1948-1954. Publicação de Ergänzungsbande em 1960, 1964 e 1972 [*Artermis Ausgabe* — *AA*].

Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, hrsg. von Erich Trunz, Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1948-1966. Deutscher Taschenbuch Verlag, C. H. Beck, München, 1982 (これは、1981 Aufl., C. H. Beck, München の改定・改善版, 1981に次ぐものである) [*Hamburger Ausgabe* — *HA*].

Die Schriften zur Naturwissenschaft, hrsg. von der Deutschen Akademie der Naturforscher (Leopoldina) zu Halle. Begründet von G. Schmid, W. Troll und L. Wolf, Hermann Böhlau Nachfolger; seit 1957 hrsg. von Dorothea Kuhn. 2 Abteilungen, 17 Bde. (Abt. I, 11 Bde; Abt II, 17 Bde.) これはゲーテの自然科学に関する著作の最も完全な版である(その所蔵になる総ての手稿を含む) [*Leopoldina Ausgabe* — *LA*].

59 [訳注]「Hier treten nun die mannigfaltigen Bezüge ein zwischen dem Bewußten und Unbewußten; denke man sich ein musikalisches Talent, das eine bedeutende Partitur aufstellen soll, Bewußtsein und Bewußtlosigkeit werden sich verhalten wie Zettel und Einschlag, ein Gleichnis das ich so gerne brauche.」[ここで、意識と無意識{意識されたものと意識されないもの}の間の多様な関係が生じてきます。大きな総譜を作成する音楽家の天分というものを考えてみてください。意識と無意識の関係は、そこでは縦糸と横糸の関係に似ています。これは私がよく使ったとえです。](小栗浩訳『ゲーテ全集 15 書簡その他』, p. 264 ; アンダラインと{ }内は引用者の付加)。

Goethes Briefe 4 Bde, Hamburger Ausgabe, hrsg. von K. R. Mandelkow u. Budo Morawe, C. H. Beck, München, 1962–1966 [HA/B]; *Briefe an Goethe*, 2 Bde, Hamburger Ausgabe, hrsg. von K. R. Mandelkow, C. H. Beck, München, 1965–1969 [HA/Ba] (小栗浩訳『ゲーテ全集 15 書簡その他』潮出版, 1981).

Dichtung und Wahrheit [河原忠彦・山崎章甫訳『ゲーテ全集 9 詩と真実 —— わが生涯より —— 第一部・第二部』, 1979; 『ゲーテ全集 10 詩と真実 —— わが生涯より —— 第三部・第四部』潮出版, 1980].

《Analyse und Synthese》[HA 13 —— 木村直司「分析と総合」, 「科学方法論」 —— 『ゲーテ全集 14』]

《Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort》[HA 13 —— 木村直司「適切な一語による著しい促進」, 「科学方法論」 —— 『ゲーテ全集 14』]

《Einwirkung der neueren Philosophie》[HA 13 —— 木村直司訳「近代哲学の影響」, 『ゲーテ全集 14』, 潮出版社, 1980]

《Erfahrung und Wissenschaft》[HA 13 —— 木村直司訳「経験と科学」, 「科学方法論」 —— 『ゲーテ全集 14』]

Faust [*Goethes Faust. Kritisch durchgesehen, eingeleitet und erläutert von Robert Petsch, 2. Ausg., bibliographische Institut, Leipzig, [1925]*; 相良守峯訳『ファウスト』, ダヴィッド社, 1962]

《Geistes-Epochen nach Hermanns neusten Mitteilungen》, HA 12 [*Sämmtliche Werke*, 11・2, Divan-Jahre 1814–1819, Carl Hanser Verlag München, 1994].

Gespräche mit [『[...]との諸対話』]

Gespräche mit Eckermann [AA, 24; *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40. Bde. Bd. 12. Johann Peter Eckermann Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, hrsg. v. Christoph Michel unter Mitwirkung von Hans Grüters, Deutscher Klassiker Verlag, F. a. M., 1999 [略称 —— *Klassiker*] —— エッカーマン(J. P. Eckermann)『ゲーテとの諸対話』, 山下肇訳, 岩波文庫, 1970]

Die Leiden des jungen Werthers

Materialien zur Geschichte der Farbenlehre [HA 14 —— 『色彩論史への諸原資料』 —— 上掲『色彩論[完訳版]』第二巻「歴史篇(色彩論史の資料)』]

Die Metamorphose der Pflanzen [*Metamorphose des Plantas* —— 『諸植物の変態』]

Maximen und Reflexionen [*M. u. R.*, HA 12 —— 岩崎英二郎・関楠生訳「箴言と省察」, 『ゲーテ全集 13』潮出版, 1980]

Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans [‘*Noten zu West-Öst.*’ —— HA 2].

《Poetische Metamorphosen》[LA I; auch WA II. 6 (70)]

《Das reine Phänomrn》[LA I]

《Der Verfasser teilt seinen botanischen Studien mit》[HA 13 —— 野村一郎訳「著者は自らの植物学研究の由来を伝える」, 「植物学」『ゲーテ全集 14』]

《Der Versuch als Vermittler von Objekt und Subjekt》[HA 13 —— 木村直司訳「客観と主観の仲介者としての実験」, 「科学方法論」『ゲーテ全集 14』]

Westöstlicher Divan [HA 2 —— 『西東詩集』]

Xenien [『クセニエ(箴言)集』]

Zur Farbenlehre [*Teoria das Cores* —— 『色彩論[完訳版]』第一巻「教示篇・論争篇」高橋義人・前田富士男訳/第二巻「歴史篇」高橋義人・前田富士男・中島芳郎訳/第三巻「『色彩論』図版集」前田富士男訳, 工作舎, 1999]

ARENDDT, Hannah

The Life of Mind, vol. 1. *Thinking*, Harcourt Brace Janovitch, New York and London, 1978 [佐藤和夫訳『精神の生活(上)第一部 思考』, 岩波書店, 1994, p. 117; 独訳 —— *Vom Leben des Geistes*. Band I. *Das Denken*, R. Piper & Co. Verlag München/Zürich, 1979].

Lectures on Kant's Political Philosophy, ed. by Ronald Beiner, The Harvester Press, The University of Chicago, 1982

ARISTOTELES

Ética a Nicómaco [*Ethica Nicomachea*; 加藤信朗訳『アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学』, 岩波書店, 1973]

Fiísica [*Physica* —— 出隆・岩崎允胤訳『アリストテレス全集 3 自然学』, 岩波書店, 1976]

Metafísica [*Metaphyica* —— 『形而上学』出隆訳, 岩波文庫, 1986; 岩崎勉訳, 講談社学術文庫, 1994].

Protreptikos [『哲学のすすめ』 —— 今道友信訳「詩学」, 出隆監修・山本光雄編集『アリストテレス全集 17』上掲書]

ARNIM, Joachim von

[*Collegit Stoicorum Veterum Fragmenta* (S. V. F.), [Leipzig, 1903-1924] 4 vol., Stuttgartiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMLXXVIII.

BENJAMIN, Walter

Gesammelte Schriften (7 tomos em 13 volumes) unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schwepenhäuser (tomos III e IV com o concurso respectivamente de [with the cooperation respectively of] Hella Tiedemann-Barthels e Tilmann Rexroth), Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1 972-1990 (G. S.).

Der Ursprung des deutschen Trauerspiels, *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1978)[G. S. I. 1 —— 川村二郎・三城満禧訳『ドイツ悲劇の根源』, 法政大学出版, 1975].

《Die Aufgabe des Übersetzers》(Forwort zu 《Charles Baudraire, Tableaux parisiens: Deutsche Übertragung mit einem Vorwort über die Aufgabe des Übersetzers》)[G. S. IV. 1 —— 円子修平訳「翻訳者の使命」『ヴァルター・ベンヤミン著作集 6: ボードレール』, 川村二郎編集解説, 晶文社, 1970所収; 野村修編訳「翻訳者の課題」『暴力論批判 他十編 —— ヴァルター・ベンヤミンの仕事 1』岩波文庫, 1994所収].

Über den Begriff der Geschichte [歴史の概念について]I. 2, pp. 691-704[浅

井健二郎訳、浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション 1 —— 近代の意味』、ちくま学芸文庫、1995；野村修訳『歴史哲学テーゼ』『ヴァルター・ベンヤミン著作集 1：暴力批判論』；野村修訳『ヴァルター・ベンヤミンの仕事 2』、上掲]

BROCH, Hermann

A morte de Virgílio [Der Tod des Vergil. Roman. Herman Broch Kommentierte Werkeausgabe. Band 4. hrsg. v. Paul Michael Lützeler, Suhrkamp, 1976；川村二郎訳『集英社版 世界の文学13 プロッホ —— ウェルギリウスの死』, 1977]

CASSIRER, Ernst

Freiheit und Form, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1961, p. 192.

DE SOUSA, Eudoro

Mitologia, UnB, Editora da Universidade de Brasília, 1980.

HEGEL, Georg Friedrich Wilhelm

Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse. Mit einem vorwort von Eduard Gans. G. W. F. Hegel Sämtliche Werke in 20 Bde., hrsg. von Herman Glockner, 7. Bd., Stuttgart 1952; Grundlinien der Philosophie des Rechts. Mit Hegels Eigenhändigen Randbemerkungen in seinem Handexemplar der Rechtsphilosophie. hrsg. von Johannes Hoffmeister, 4. Aufl. G. W. F. Hegel Sämtliche Werke. Neue Kritische Ausgabe. hrsg. von Johannes Hoffmeister, XII. Bd, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1955[速水啓二・岡田隆平訳『ヘーゲル全集 9 法の哲学-自然法及び国家学』, 岩波書店, 1950；高峯一愚『法の哲学-自然法と国家学』, 論創社].

HELLER, Erich

《Goethe and the Idea of Scientific Truth》, in *The Disinherited Mind. Essays in Modern German Literature and Mind*, The Penguin Book, London, 1961.

HUMBOLDT, Wilhelm von

《Über Denken und Sprechen》[1795-1796] *Wilhelm von Humboldts Werke*, hrsg. von Albert Leizmann [Berlin, 1907] 7. Bd., 2. Hälfte [Paralipomena]; *Werke in 5 Bde.*, hrsg. von Andreas Flitner und Klaus Giel [Stuttgart, 1907] 5. Bd.

KANT, Emmanuel

Kritik der Urteilskraft [critica da Faculdade de Julgar (AK V) —— 原佑訳『カント選書 判断力批判』, 理想社, 1981 —— AK V の1913年版による]

KAULBACH, Friedrich

Ästhetische Welterkenntnis bei Kant, Königshausen und Neumann, Würzburg, 1984

NIETZSCHE, Friedrich

Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag, de Gruyter, Berlin/New York, 1980[略号 —— *Sämtliche Werke* : 『ニーチェ全集』白水社]

Also sprach Zarathustra, Ein Buch für Alle und Keinen, Bd. 4 [蘭田宗人訳『ツァラトゥストラはこう語った』, 全集, 上記, 第一巻[第II期]].

Friedrich Nietzsche Gesammelte Werke. Band XIV. Aus der Zarathustra- und Umwertungzeit 1882-1888 (Aus der Nachlass). Musarion Verlag München, 1925; *Sämtliche Werke*. Bd. 10 [杉田弘子・藺田宗人訳『ニーチェ全集 第六巻(第二期)遺された断想(一八八三年五月一八四年初頭)』, 白水社, 1984].

PLATON

Phaedrus [Fedro — 藤沢令夫訳「パイドロス」——『プラトン全集 5 饗宴・パイドロス』]

Teeteto [*Theaitetos* — 田中美知太郎訳「テアイテトス」, 『プラトン全集 2 クラテュロス・テアイテトス』, 岩波書店, 1998]

PLOTINOS

Ennéades, Texte établi et traduit par Émile Bréhier, Société d'Édition «Les Belles Lettres», Paris, 1960³ [*Enneades*; 田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳『プロティノス全集』第1~4巻, 中央公論社, 1986-7]

SCHELER, Max

Schriften aus dem Nachlass, Bd. II *Erkenntnislehre und Metaphysik*, 1979.

SIMMEL, Georg

Goethe, Vrlg. von Klinkhardt & Biermann, Leipzig, 1913 [4. Aufl. 1921]

STIEDENROTH, Ernst Anton

Psychologie zur Erklärung der Seelenerscheinungen, Erster Teil. Berlin, 1824.

VALÉRY, Paul

《L'homme et la Coquille》, *Oeuvre*, Tome I, Bibliothèque de la Pléiade, NRF Paris, 1968, pp. 886-907 [斎藤磯雄訳「人と貝殻」, 『ヴァレリー全集 9 哲学論考』, 筑摩書房, 1967, pp. 142-168.]

WEINHANDL, Ferdinand

Die Metaphysik Goethes, Junker und Dünhaupt Verlag, Berlin, 1932, pp. 218-214.

WITTGENSTEIN, Ludwig

Vermischte Bemerkungen, Eine Auswahl aus dem Nachlaß, hrsg. von Georg Henrik von Wright. Unter Mitarbeit von Heikki Nyman. Bibliothek Suhrkamp, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1978², p. 153 [1949].

(なお・しろう 経営学部教授)